
時間短編

一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間短編

【Nコード】

N5559C

【作者名】

一文字

【あらすじ】

秋晴れの三連休初日、サユキは一人の青年と出会う。青年は三日間を繰り返していると言い、そこから抜け出すのにサユキに手伝ってくれと言った…。

1・金曜日・逃走(前書き)

初投稿作品です。

読み直すたびに手直しを入れていますが、カタチになったので投稿します。

まだまだ未熟な作品・作者ですがよろしく願います。

1・金曜日・逃走

アクション映画ではよく爆発するシーンが使われる。

ガラスは粉となり、車は宙を舞い、人々は逃げ惑う。

テロリストが鞆に仕掛けた爆弾が爆発し、アパッチから発射されたミサイルで爆発し、なぜか分からないが車に主人公の撃った銃弾が命中して爆発する。もしこれが現実ならば、ニューヨークとハリウッドは今頃月面のようにクレーターだらけだろう。

そんな爆発シーンも最近は見慣れてきた。ただ派手なだけの爆発シーンでは「なんだ、また爆発してるよ。別に驚かないね」と注意を引けなくなった。

だがそれは、スクリーンの向こう側での話しである。もし、直接爆発を目撃したら「ああ、別に驚かないね」なんて言っていられないだろう。

彼女の目の前で繰り広げられた出来事は、爆発でもカーチェイスでもない。爆発を見慣れた観客の注意をひきつけられるような、派手な出来事ではなかった。

それでも、その後の3日間は、彼女にとっても彼にとっても、特別な意味を持つ時間になった。爆発のような派手さは無いが、普通では得がたい経験をした。

彼等が失ったものと、得たもの。そのためにどれほどの時間を掛けたのか。それすら分からない出来事。

彼女が何をして、何をしなかったのか。

それを確かめてみよう。

話は、9月の最終週に始まる^{おわり}。

秋が哀愁の季節だという理由の一つは、夏の後だからだろう。

夏は開放的で活発、そんなイメージが一番似合う季節で、そんな終

わってしまった夏への名残が、秋という季節が持つ哀愁の正体なのかもしれない。

サユキは夏の賑やかさより秋の静かさの方が好きだった。

冬の拒絶するような寒さより秋の穏やかな涼しさが好きだし、春の何かが始まるうとする暖かさより秋の落ち着いた陽だまりの暖かさが好きだった。

人の性格は季節では変わらないが、好きな季節で天気がいい日なら、少しくらいは上機嫌になるだろう。

全く雲のない青空、過ごしやすい気温。そんな絵に描いたような秋晴れだったその日、彼女の足取りがいつもより軽くても何の不思議もない。

世間は金土日と三連休で、初日の今日は絶好の行楽日和とどの放送局のお天気キャスターも太鼓判を押していた。

そんな連休初日、サユキは一人で大きなショッピングセンターに来ていた。地元の人には『モール』と呼ばれており、店内には大小さまざまなショップが入っている巨大複合商業施設だ。

その最上階にある映画館で、同じクラスの友達と映画を見る約束をしてある。待ち合わせより早めについてしまいそうだが、この場所は暇つぶしには困らない。サユキは、待ち合わせの時間はきっちりを守るタイプの人間だ。

親友がチョイスした映画は、邦画のラブストーリーのようだ。映画館に行くのはずいぶん久しぶりになる。最近ではレンタルビデオや、民放の映画放送でしかみていない。本来映画館でみるように作られた映像作品なのだから映画館で見るべきだとは思うが、値段を考えるとためらってしまう。彼女はまだ高校生なのだ。

モールの一階の道路に面した壁はガラス張りになっていて、外にいる彼女から中の様子がよく見えた。休日という事もあり店内はやや込み合っているようだ。

足取りの軽い事は悪い事ではない。だから突然目の前のビルのガラスを突き破って一人の男が飛び出してきたとしても、それは彼女のせいではないはずだ。

映画ではもはや見飽きたと言ってもいいそんな場面を、現実で見るとは思わなかった。

まあ映画みたい、なんて落ち着いて観察できるはずもない。突然の事で事態が飲み込めない彼女だが、腕をクロスさせ顔を庇い、黒いコートとズボンに革靴と全身を黒でコーディネートした男 青年と言っていていだろう が飛び散るガラスを引き連れて飛び出してきたその姿は、はつきり覚えている。ガラス片を撒き散らしながら着地した男は、そのまま彼女のほうへ走ってきて、そのまま走り去っていく。

と思った。だが、男はサユキの顔を見てハッと立ち止まる。その反応は明らかに知り合いにあつた時のそれだ。

一方サユキには男に見覚えは無い。知り合いには断じて白昼堂々ビルのガラスを突き破って飛び出してくるような派手な人はいない。彼が足を止めたのは、きつと自分が通る邪魔になったからだ。そう思った。だがこの予想は外れる。突然男はサユキの右腕を掴んで

「来い！」

そういつて走り出す。

映画なら二人で走り出すシーンだが、それがスクリーンの中だけだという事を思い知る。

心も体も、走り出す準備など全く出来ていないのに突然腕を引かれても、足はついていかない。腕を引かれて足が出なければ、転ぶのは当然の結末だった。

つかまれている左手をとっさに出したものの 驚いた事に、男は転んでもサユキの右手を離さなかった 膝に痛みが走る。

スクートを履いていなくてよかった。混乱した頭でそんな事を考えると背後から突然

「待て、コラア！」

と怒鳴り声が聞こえた。最後の『ア』は声が裏返っている。振り返ればたった今破られたガラスから警備員が出てきている。それも二人だ。

サユキの右腕を掴んだ黒い男は最低でもガラスをぶち破っている。それはつまり 彼の趣味がガラスを破る事じゃない限りは ガラスを破らざるを得ない事をしたのだ。どんな事をしたのか想像もつかないがあまり真つ当な事では無いと思う。

「行くぞ！」

そんな警備員を見て男は走り出す。腕をつかまれたまま、半ば拉致されるように彼女も走り出した。『ア』の声が裏返って面白い、などという余裕は無い。膝の痛みなんてすぐに吹き飛んだ。本気で誰かに追われるというものは、想像以上に恐怖だった。

後になってサユキは不思議に思う。

自分はこの時彼の手を振り解いて、自分は無関係だという事もできたはずだったが、それをしなかったのは何故なのだろう、と。

混乱しているところを警備員に追いかけられていたから、反射的に逃げてしまったのだろう。そう考えることにしている。だが、もしかしら

どこかでこんな『映画のような』展開を望んでいたのかもしれない。毎日学校へ行つて、昨日と同じような授業を受けて、同じように友達と会話をして、そして明日も同じような日々が続いていく。そんな日常に嫌気がさしたのかも知れなかった。だから、どこかで非現実的な事にあこがれていた。だから、あの時彼の手を振り解くことなく、逆に握り返すくらいの勢いで自分は警備員と、『現実』から逃げたのではないのか。

逃げ込む先に、何があるのかも知らずに。

2・金曜日・公園告白

結果から言うと、逃走は成功した。

一分程の全力疾走と、三分ほどのマラソンのような走り、最後はもう走れなくなって歩いて、とにかく逃げ切った。

「ちょっと、もう、本当に。ちょっと、待って」

ついに歩く事も出来なくなり足を止める。

息をすると肺が痛い。明日は筋肉痛確定だ。

どうしてこんな限界まで走ったのかというと、今この瞬間も男が右手首を掴んでいるからだ。まるで手錠のようにサユキの手首を離そうとしない。

動かなくなったサユキにつられて、ようやく男は歩みを止めて振り向く。

サユキは暫く膝に手を当てて息を整える。どこを通ったのかわからないが、いつのまにか住宅街に入ってきていた。

後ろを振り返り、警備員が追いかけてきていない事を確認して、改めて息をつく。

なんとか逃げきれたと安心したのと同時に、怒りが湧き上がってくる。

「あなた誰です、あのビルで何をしていたんですか！？なんで私を連れてきたんです？」

明らかに不審者である男に手を掴まれて走らされたのだから悲鳴を上げてもいいのだが、サユキは大声を相手の非難に使った。

サユキの怒りの形相に驚いた顔をしている男に、続けて言葉をぶつける。

「黙ってないで何か言ったらどうなの、でもその前に謝ってください！あなたのせいで」

ズキッとヒザが痛んだ。

苦痛に言葉が途切れたが、相手はサユキが何を言いたかったのか理

解したようだ。丈が長いズボンのため外からでは傷は見えないが、視線が右ヒザに注がれる。

「それは俺が手を引いた時に」

「そうですねよ、それでも引つ張られたせいで手当てもできなかったじゃないですか！」

相手に最後まで言葉を言わず、口早に責める。

「ああ、ごめんな。こんな事になるとは思わなかったから」

一応、謝られた。だが心から謝っているようには見えない。

カツとなってさらに文句を言おうとした瞬間、突然男はサユキに背を向け

「こっちに来て」

とだけ言い歩き出す。

「ちよつと、こっちってどこへ行く気ですか!？」

やはりそれについていく必要は無いの、背中を追ってしまう。

男がやってきたのは、小さな公園だった。

秋晴れの休日。元気に走り回る子供達と、それをベンチに座って世間話をしながら見守る母親たち。それは、のどかで平和の象徴のような風景だった。

男は公園の隅を通って、やはり隅にあるベンチまで来る。木製で、ペんキはあちこちはげている。おそらく元の色が水色だったのだろうと分かるくらいだ。ささくれ立った表面には砂がまぶされていて、お世辞にも綺麗とは言いがたい。

「膝、大丈夫？」

「え…。まあ、大丈夫ですけど」

突然聞かれ、反射的にそう答えてしまう。

「そうか、ならいいや」

ならいいや? という意味だ?

大事に至らずに済んでよかった、という意味だろうか。それとも、謝罪しなくてもいいや、という意味だろうか。

疑惑と迷惑の混じった視線で男を睨む。が、当の本人は全く気にし

ない様子で公園のベンチに座る。そして、なぜそんなに俺を見ているんだ？という顔をしながら

「とりあえず座ってよ」

と、どうでもいいような口調でいう。だが、正体の知れない男と一緒にベンチに座る趣味はない。ベンチに座るところか、一緒にいる必要もないだろう。

とにかく謝らせて帰ろう。

「座りません。その前に謝ってください」

椅子にだらしなく座る男の前に立ち、毅然とした態度で言う。某国の政治家にも見習って欲しいものだ。

「……ああ、わるかった。ごめんな」

あまりにも適当な答え。まるで某国の対応のようだ。

この男にこれ以上何を言っても無駄だ。たとえ適当といえども謝罪は謝罪。それさえ聞ければもう用はない。

「そうですか。それじゃあ失礼します」

男に背を向け歩き出す。

せっかくの三連休の初日がこんな事になるとは思わなかった。が、これ以上この男にかかわると面倒な事になりそうだ、ここが引き際だろう。どこにもやり場のない怒りを抱いて、公園から出ようとする。

周りには人もいるから、さっきのような力技にはでられないだろう。男が取れる行動は声をかける事だけ。けれど、声なら無視すればいい。どんな言葉をかけられても決して止まらず振り返らない。

だが、決して止まらぬはずのサユキの足が止まる。

もちろん肩を掴まれた訳でも公園の出口に男の仲間が待ち伏せていた訳でもない。

男は声をかけただけ。決して止まらないはずの彼女の足を止めた言葉。それは、脅迫でも懇願でもなく

「ちよつと待つてよ、ニシカワサユキさん」

サユキのフルネームだった。

魔術師にとって名前とは重要な意味を持つ。その存在を縛り付けるためだ。そんな考え方は西洋魔術だけでなく、日本でもあったらしい。会話の中で本名を出さないよう、相手を示す言葉がたくさんできた。あなた、貴殿、おまえ、貴様……。とりわけ目上の人に多いのは、重要な人ほど呪いにかからぬようにしたためだとか。

なるほど、確かに彼女の名前を知っている事で、男はサユキの動きを封じた。もしかしたら魔術の原理はこういう事なのかもしれない。もちろん呼び止められたサユキにはそんな事を考える余裕などない。見知らぬ男に自分のフルネームを知られているという事実は、サユキを混乱させていた。足を止めたばかりか振り返ってしまう。

「どうして、私の名前を…?」

「ん、昨日君に聞いたんだよ」

先日のことを思い返してみる。当然、こんな男と会った記憶はない。何しろ昨日は学校があつた日だ。

「昨日は学校がありました。あなたとは会ってません」
そう言いつつ記憶の中を検索してもこの男は出てこない。

長めの髪に、切れ長の目。黒一色の服装だが、彼によく似合っている。十分にかっこいいという部類に入るだろうが、その全てを台無しにしているのが表情。特に目だ。死んだ魚とは表現だと思っていたが、その目をした人が本当にいるとは思わなかった。何を経験したのか知らないが、『諦め』ている。

「ああそうだ、間違えた。明日だった。悪いな、最近人と話して無くて、感覚がずれてた」

普通の顔をして、日常会話のように男が言う言葉の意味が分からない。頭がおかしいのかもしれない。名前を知られている事にかまっている場合じゃない。とにかくここから逃げないと。

男は、そんなサユキに続けて声をかける。

「俺が狂っているとか考えているだろ?」

からかうように、試すように。暗い目でサユキを見る。

心を読まれたような錯覚を覚え、とつさに言葉が出ない。

「まあそれが普通だな」

ふう、と大きなため息と共にそう吐き出す。

諦めが似合っている。というか、諦めに気に入られているようだ。

「君が俺に対して今警戒しているのは分かる。ついでだから言ってしまうけど、俺がモールで何をしていたのか教えておく。

まあ、簡単に言えば強盗をしてきた」

それは「たまねぎ買ってきた」というのと同じくらいの緊張感の無さで語られた、あまりにも淡々とした告白だった。冗談だろうと思つた。

が、ビルから出てきたときの状況を思い出す。破られたガラス。後を追いかけてきた警備員。強盗をしてきたという言葉を裏付けるには十分すぎる。

では、この男のいう事が本当だとしよう。その場合、彼が自らの罪を告白する事のメリットは？

分からない。というか、無い。逆にデメリットだらけだ。ここまでつれてきた事への、彼なりのお詫びなのかもしれない。

もしくは「冥土の土産」というやつか。あまり考えたくないが。

一つ確かなのは、サユキの中で警戒カウンターの針が上昇していく。そんなサユキを全く気にせず、男は話し続ける。

「あのビル、モールの最上階にある特設ホールで今何が行われているか、知っているか？」日本各地に残される神の足跡展』という展示会をやっている。江戸時代までの出土物やのうち、神に關した物だけを集めて展示しているんだ。

この国は全ての物事に神が宿っているからな。なかなか興味深い展示だった。普通に戻ったらもう一回行ってもいいかな」

さつきからこの男の言葉の意味が分からず、ありありと警戒の色を浮かべているサユキの顔を見て男は笑う。それは、出来の悪い生徒を見て苦笑する先生のようなだった。それでもやはり顔色から諦めの色が抜けない。

「そう、君が思っている通り俺は今普通じゃないんだ。別に怪我や病気をしているわけじゃない、それよりももっと性質タチがわるくてね」
そこで彼は一度言葉を切つてサユキを見る。真剣な顔で、目には縊るような色をたたえている。このときだけは、諦めの色が抜けていた。

「俺は、今日から日曜までの三日間を繰り返している。ただ繰り返しているだけじゃない。逆行しながら繰り返しているんだ」
何を言われたのか理解は出来なかったが、サユキの中の警戒カウウンターがレンジを振り切った事だけは確かだった。

3・金曜日・公園受諾

沈黙が流れる。

男は椅子に座りながら正面にいるサユキを見据え、サユキは不信感むき出しの顔で男を睨む。

目の前の男は、普通じゃない。普通であれば真顔で『時間を逆行している』なんて言えないだろう。どうやら自分は今、面倒な事に巻き込まれかけているようだ。

こんな事なら公園まで来ないで帰ればよかった。

その前に腕を掴まれた時点で抵抗すればよかった。

そもそも今日モールなんか行かなければよかった。

後悔が頭の中で連鎖する。

そのどれもが圧倒的に手遅れという状況の中で、なぜ全ての選択肢でこの男についてくるといふ選択をしたのか。サユキはその理由に気がつかなかった。

「もう少し詳しく言えば、あさつての日曜から今日の金曜までの三日間を繰り返しているんだ。だから俺は今日が終わると日曜へと戻るんだ」

男は冗談を言っているような顔で、冗談としか思えない事を口にす。だが目は本気だ。

「つまり、あなたは明日から来た？」

「そう、俺にとつての昨日は君にとつての明日だ」

「じゃあ私の名前を昨日聞いたつてというのは」

「俺にとつての昨日で、つまり君にとつては明日だ。」

ちよつとトラブルに見舞われていた君を俺が偶然助けてね、そうしたら君がお礼をしたいと言っからとりあえず名前を教えてもらった」

「トラブルつて、一体どんな？」

「たいした問題じゃない。道端で性質タチの悪い奴らに絡まれていたんだよ」

よくある事だろ？というような口調だが、サユキにとっては大問題だ。

過去十七年間でその手のトラブルに巻き込まれた事は一度も無いが、その記録も明日までだという。この男が助けてくれるというが…。

どうしよう、と考えて、話に飲まれかけている自分に気が付く。

冷静に考える。時間を逆行している？三日間を繰り返している？ありえるはずがない！

自分の名前を知っていたが、それは調べれば分かる事だ。この男が自分の名前を知っていてもそれは未来から来た証拠にはならない。

これは適当なところで手を引いたほうがよさそうだ。

そう考えたサユキに、男は

「俺が助けたのは明日の君だから、今の君に頼むのは筋違いかもしれない。けど、お願いだ、手を貸して欲しい」

そう言っって頭を下げた。

サユキは委員長である。各種イベントではクラスを取りまとめ、学校側と打ち合わせをする、敬遠される役職No.1だ。

頭がよく真面目で責任感もあり友達も多く人とすぐ打解けられる彼女は、それだけでも委員長能力は高い。だが何より彼女を委員長たらしめている素質は別にある。それは、困っている人を見過ごせないという性格だ。

四月にクラスが決まり最初のホームルームで各委員が選出されるが、最初に委員長が選ばれる。当然そんな面倒事は誰もやりたがらず、誰かの推薦によって決まる事がほとんどだろう。だがサユキは、誰かが委員長を押し付けられて嫌な思いをするくらいなら私がやろう、と考える。

その結果、小学校一年から今日に至るまでの十一年間委員長をやってきた。そんな彼女を「先生へのごますりだ」や「内申書アップを狙っている」などと言うクラスメイトもいた。だがそんな人よりも

友達の方が多いためサユキ自身は全く気にしていない。

今、彼女の目の前にいる男は言動がおかしい。だが狂っているようには見えない。瞳には理性の光がある。

もしかしたら彼は、何かの理由で「未来から来た」という嘘をつかねばならない状況にいるのではないか。そしてそれは彼が困っているという事で、見ず知らずの自分に「手を貸して欲しい」なんて頼む様子から、相当切羽詰っているようでもある。

そんな人を見捨てておけない。

彼女の悪癖はここで発揮されてしまう。適当に相槌を打って帰れば、名前を知られるくらいですんだ。だが、サユキにはそれが出来なかった。

立ったまま大きく息を吐き出して 男の隣に座りながら、

「で、私は何をすればいいんですか？」

そう聞いてみた。

隣からは息を呑む気配。

「…俺のいう事を信じるのか？」

そう聞いてくる男の目は信じられないようなものを見る視線。それを見返しながら

「…嘘なんですか？」

そう聞き返すサユリは真剣な眼差し。

あなたが言うことを信用しますから、もし嘘なら今すぐ嘘だと言ってください。言葉ではなく、視線でそう言った。意味は伝わったはずだ。

先に視線をそらしたのは男のほうだった。

「…信じてもらうのに一時間くらい説明が必要だと思ったのだが、肩透かしをくらったようだ」

そうばやく顔にはしかし、安堵の表示が浮んでいる。

「…別にいいですよ、その一時間くらいの説明を聞いても」
すまし顔でそう言ってやる。とにかく、男から緊張が抜けたことが

分かった。

「時間がもつたないからな、それは今度にしよう」
そう前置きして、男は今の自分の状況を語り始めた。

それはある日突然始まった。理由？それは俺にもわからない。

月曜だと思って朝起きて、テレビをつけたら土曜日の番組がやって
いた。おかしい、今日は月曜だぞ？それとも、最初は最近仕事ができ
ついで、ついに曜日まで間違えるほど疲れがたまったのか？なん
て考えた。

だがどう考えても今日は月曜だ。ならばなぜテレビは土曜の番組を
放送しているのか。そして、これはテレビのドッキリ企画ではない
かと思った。だから部屋の中に隠されているはずのカメラを探した
し、どこかに仕掛けてあるはずのマイクも探した。だが何も見つか
らなかった。

それでもまだ俺は、今日は月曜だと思って会社に向かった。そして
駅に着いて、電車が休日ダイヤで動いているのを見て、今日は土曜
だと信じざるを得なかった。

俺の会社は週休二日だね、土曜に会社に行っても仕方ないからその
日は帰った。一体何が起きているのか分からないが、一晩たてばも
とに戻るんじゃないか。そう考えてその日はさっさと寝たよ。そし
て次の日起きてみたら、ああ、これは予想外だったな、まさか金曜
になっているとは思わなかった。

俺以外の人は普通に生活しているから、こんな目にあっているのは
俺だけなんだって分かった。でも、誰が、どうやって、何のために
こんな事をしているのか分からない。

そうして永遠に時間を戻り続ける事になるのかと思ったら、それも
違った。金曜に寝て起きたら、最初の日曜だった。これを進んだと
言うのかはわからないけどな。

この三日間を何度も繰り返し返している。その中で、俺は普通の生活に
戻るために色々なことをした。海外まで逃げたし、死にそうな人を

助けたこともあった。ああ、賽銭箱に全財産投げ込んで教会でお祈りしたこともある。結局、全て無駄だった。未だに俺はこの螺旋を抜け出せない。

これが、男が話した今の状況と言うヤツだった。正直、驚きを通りこしてあきれ。これではへ々な三文小説じゃないか。

だが、彼を助けるのならばこれを信じないといけない。信じたふりをしなければならぬ。

「そして最近、この繰り返しから抜け出せるかもしれない鍵を見つけた。それが、モールの最上階でやっていた展示会だ」

その言葉でサユキに緊張が走る。この男はついさっき強盗を働いてきたのだ、油断してはいけない。

「日本には昔から様々な物や場所に神がいるとされてきた。ハツピヤクマンと書いてヤオヨロズだ。太陽や月、雷や雨と言った自然から、刀、着物、布団、下駄。そして時間……」

そういいながら男は、上着の内ポケットから小さな球形を取り出した。大きさはピンポン玉より一回り小さい。秋の日差しの中で、透明なガラス玉に緑色の墨汁を流し込んだように深い緑色が球体の中でゆっくりと流動している様子は例えようもなくきれいだった。

「この宝珠は、そんな時間の神様が祭られていた神社の宝物殿にあった物。伝承では、この珠を持っていくと神隠しに会わない、もしくは神隠しに会っても戻ってこられるらしい。今の俺の状況は神隠しにも似ているだろう。」

だったらこの珠を持っている事で、俺は3日の繰り返しから日常に戻れるんじゃないのか」

最後はまるで自分に言い聞かせるようでもあった。

「それが、午前中にあなたが…持ってきた珠ですか？」

さすがに『あなたがモールから強奪してきた』と直接言う勇氣はない。

「ああ、そして君にお願いしたい事っていうのはこのことなんだ」

そついいながらサユキへ宝珠を手渡す。受け取った宝珠は思いのほか軽くて、ひんやりと冷たかった。一体どうやってこれを作ったのか想像もできない。外はガラスのように固く透明で、完全な球形をしていた。欠けやヒビはもちろん、球がゆがんでいる事もない。その透明な殻は、昔テレビで見た水晶のドクロを連想させる。そして中は何で出来ているのかももちろんわからず、常に流動している。色は違うが、木星の模様を思わせる。

「この宝珠を、どうするんですか？」

宝珠を返そうと男に差し出す。が、男はそれを受け取るうとしない。
「……………」

「その宝珠を日曜日の俺に届けてくれないか」

疑問形の形をした、お願いだった。

「でも、これって窃盗品ですよね？」

「俺が警察に通報するって心配しているのか？大丈夫、盗んだのは俺だ。そんな面倒なことはしない」

「どうして私に？自分で持っていればいいんじゃないですか？」

「この珠が必要になるのはたぶん逆行が始まる日曜の夜だ。でも俺では日曜まで持っていけない。逆行しているからな。」

だから正常な流れをしている君に預かって欲しい。そして、日曜の俺に渡して欲しいんだ」

「それなら日曜に盗み出せばよかったんじゃないですか？」

「それは無理だ。」

今日の夜に、あの展示室は燃える」

会話が途絶える。サユキは男が言った言葉の意味が分からなかった。
「…え？燃える？」

相手の言葉をそのまま反復するのは理解していない証拠だ、という定説があるが今のサユキはまさにそれだ。

「モールの最上階は燃える。ニュース風に言えば今夜未明に火災が発生する。といっても大きな火災じゃない。あの展示室の一角が小火を出すだけだ」

この男の言葉の意味をサユキはよく考える。

未来に起きる事を言い当てる『予言』なのか。

それとも、未来に起こす事を言う『予告』なのか。

「どうする、俺の頼みを聞いてくれるか？」

男の真面目な顔が、ここが最後の分かれ道だと言っている。

断れば、戻れる。今すぐこの公園を出て家に帰る。そしていつも通りの平和な三連休を過ごせる。

もし引き受けると。この三連休がどうなるのか想像もできない。

あこがれていた非日常の扉。そして、困っている人を放っておけないという性格。

迷う振りをしながら心はもう決まっていた。

「……………名前」

「え？」

サユキの問いかけが聞こえなかったのか、男は聞き返す。

「だから名前、まだ聞いていません。今度会った時、なんて呼べばいいんですか？」

「あ、ああ。俺の名前は、ニイジマカズタカ。名乗るのが遅れてわるかった」

名前というのは大きな意味を持つらしい。そして名前を教えるというのは、信頼の証でもあった。

「カズタカ、さん」

自分の口で名前を言うのと、目の前の男 カズタカがはっきりと一人の人間として意識できた気がした。

少し恥ずかしそうにうなずく男に、

「…………… 案外、普通な名前ですね」

率直な感想を口にした。

4・土曜日・焼肉口論

目が覚めても、机の上で輝く深緑の宝珠を見るまで昨日のことは夢だと思っただ。

この珠を、日曜日の俺に渡してほしい。

その願いをサユリは受けた。委員長気質が災いしたと思っている。だが本当はそれだけではない。きっと、自分はこの事態に憧れていた非日常に、期待している。

カズタカのいう事 未来から来たとか、繰り返しているとか は信じていない。だが、決して利子利欲でこの宝珠を強盗するような悪人には見えない。

やはり何かの理由があつてこの宝珠を手にいれなければならなかったのだ。例えば、そう。どこかの組織から『恋人は預かった、返して欲しければ宝珠と交換だ』というような事を言われていて、それで自分には本当のことを言えずに未来から来た、なんて嘘をついたのではないか。

だが、もしそうだとすると自分に宝珠を渡す必要はない。自分で持つていけばいいのだから。つまり、今日宝珠を持つていけるとなにか都合が悪くて、明後日には絶対に必要になる。

こんな小さな珠、預かるだけならどこでもやってくれるだろう。駅のコインロッカーに入れておけばそれでおしまいだ。だが、組織に常に監視されていてもしロッカーを破壊され宝珠を持つていかれたら……。

そこまで考えて気が付く。今、そのコインロッカーの役目をしているのはサユキではないか。

「…もしかして、私ってヤバイのかな？」

口に出して、ぞっとする。慌てて窓のカーテンを閉めた。部屋が薄暗くなる。

部屋の外からはテレビの音と、両親の話し声。今日は休日だから二

人とも家にいるのだらう。平和な休日の朝そのもので、今のところ不穏な様子はない。

時間は午前七時。休日の朝としてはまだ早い時間だ。

ふう、と息を吐いて仰向けにベッドに倒れこむ。

何が本当なのか今の自分では分からない。

宝珠を見る。薄暗くなった部屋の中でもそのきらめきは色あせずまるで自ら光を放っているかのようで、悩むサユキに微笑みかけているようだった。

詳しい話は明日の俺に聞いてくれ、多分今日会った時間にモール辺りにいるから。

昨日、そう言っただスタカは帰って行った。その言葉に従ってサユキは今モールの前にいる。昨日ガラスをぶち破って飛び出した馬鹿者がいたため、ガラス張りの壁の一部はビニールで覆われている。だが、この日は誰も破られたガラスは気にしていなかった。それはサユキも例外ではない。

入り口には警備員が立っており、扉は閉ざされている。ガラス張りの中では、警察官が忙しく動き回っていた。そんな異常な風景でも、目をやる人は少ない。モールの前に来た人は、例外なく上を最上階を見上げる。

昨日最上階の特設ホールが火事になる、と予言されたビルは、最上階の外壁が黒ずんでおり彼の言葉の正しさをその身で示していた。

「……………うそだ」

サユキは呆然とつぶやく。

彼が言っていた。モールが燃えると。

つまりこれは事故ではない。何者かが燃やしたのだ。そしてその計画にカズタカはかかわっている。そして、それを知っている自分はどうなるのだらう。

数時間前に考えた、自分の身は安全なのか、という問題。慌てて周

困を見回す。

休日という事もあって人通りは多い。だが、黒スーツにサングラスでじっとこっちを見ているような分かりやすい不審者は、今のところいない。

そのかわり、少し離れたところでやはり建物の上を見ている黒い服の男に気がついた。

カズタカだった。

やはり他の人と同様に、最上階を見上げている。もうすでに鎮火しており、炎や煙が出ている事もない。だから普通の人なら少し眺めて、すぐに興味を失う。

だが、カズタカは違った。いつまでも眺め続ける。まるで睨むように、挑むように。そのまっすぐな眼差しを見てもう一度確信する。彼は悪い人じゃない。何か事情があつて、未来から来たなどと言っているのだろう。

だからしばらくは、彼の嘘に付き合おうと思った。

「やっぱり、この火災は自分の繰り返しに影響していると思います？」

後ろからそう話しかけるとカズタカは、「バツ！」という効果音が相応しい勢いで振り返る。

そうして、サユキの全身を見回して それは異性を見る目ではなく、単純に純粹に戦力分析の視線だ 相手が何の変哲もない女の子だと一応認識したらしい。まだ身体が緊張状態であるため、完全に信用していない事はわかる。

「誰だ？なぜそれを知っている？」

時間を逆行していると昨日のカズタカは言った。つまりサユキにとって昨日の事はカズタカにとって明日の事。昨日のカズタカは、明日君を助けたと言っていたが、目の前のカズタカはサユキに面識はないらしい。

昨日知り合った事で違う未来になった、とでも言いたいのだろうか。

「昨日のあなたに聞いたんですよ、カズタカさん」

警戒を解かないカズタカに昨日の台詞を返してやる。

カズタカはその言葉の意味を考えている。彼女を警戒するその姿は、昨日の別れ際とは別人のようだった。

しばらくして、

「昨日の俺、ね。ならば俺の状況も分かっているのか？」

「大体聞いています。でも」

「信じるのか？」

突然の質問。

声はこれ以上ないくらい真面目だ。冗談を言えるような雰囲気ではない。

「……信じます」

昨日の焼きまわしだが、昨日とは何かが違う。そう感じながらも、サユキははつきりと答えた。そうしてにらみ合う二人。サユキには長い時間のように感じたが、実際は数十秒ほどだ。

やがて、ふつと力を抜くカズタカ。

「そうか。すこし聞きたい事があるんだ、どこか座って話せる場所に行きたいんだが……」

そう言つてカズタカは腕時計を見る。その声と態度から警戒が解けたことが分かった。

サユキも自分の腕時計を見る。時間は十時を少し過ぎたところ。

「十時じゃ、お昼には少し早いですね？」

そういうサユリに、

「つまり今なら食事所も空席があるということだろ？」

と、ポジティブな事を言つてニヤッとわらう。

その子供がいたずらを自慢するような、純粹な笑顔をみて一瞬サユキの意識に空白が生まれる。

それを悟らせぬよう

「いいですよ、行きましょう」

サユキが答えて、二人ははまだ現場検証が続くモールを後にした。

座って話せる場所、と言っていたのでサユキは、コーヒーショップかファーストフード店に入るのかと思っていた。

だがカズタカに連れられて行った先は、焼肉屋だった。

時間はまだ昼前。開店してまもなくといった雰囲気だ。

すこしためらうサユキに

「どうした？焼肉屋は初めてか？」

「いえ、初めてではないですけど…。本当にここに入るんですか？」

「そのつもりだ。もしかして焼肉嫌いか？」

「いえ、そうじゃないんですけど…」

なら問題ないじゃないか、とカズタカは店に入ってしまった。

こうなったら仕方ない、と覚悟を決める。

別にサユキは菜食主義者ではないし、焼肉も嫌いではない。だが、昼間から食べるものでもないと思う。

最後に体重計に乗ったのはいつだった？自問しながら、店に入る。

サユキだって、女子高生なのだ。

店は当然空いている。2人なのにもかかわらず、カズタカは4人用のボックス席を占拠した。最初のお飲み物は？という店員に、2人ともウーロン茶を頼む。

「ビールじゃなくていいんですか？」

半分冗談、半分本気で聞いてみた。

「昼間から酔っ払ってどうする？」

一応時間の意識はあるらしい。ならば焼肉屋などに入らないで欲しかった。

ふと、気になった事を聞いてみる。

「そういえば、何歳なんですか？」

見た目では十九から二十二歳といったところだ。アルコールが飲めるのか、非常に微妙でデリケートなラインである。

「一応今年で22歳になる」

アルコールは飲めるようだ。ついでに自分と4歳差という事になる。「まあ、繰り返している間をカウントするともっと年上って事になるんだろうけどね」

「もつとつて、どれくらいの間その……」

繰り返しているのか、と聞いたかったのだが自分の口からその言葉が出せない。

そんなサユキの言いたいことをカズタカは読み取ったらしい。

「どれくらい、か。どうだろう、数えていないし季節が巡るわけでもない、まして俺自身が老化ふけてしていくわけでもないからな。それでももう一年くらいは繰り返している気がする」

1年。365日。それはサユキの想像を上回る期間だった。とりあえずはそういう設定らしい。

これ以上その話はしたくない。サユキは話題をそらす。

「何で焼肉屋なんですか？てつきりコーヒーシヨップとかファーストフードとか、そういうお店に入ると思ったんですけど」

「ああ、それはな」

ちようどそこで、店員がウーロン茶を持ってやってくる。

ついでにカズタカは、シーザーサラダとキムチ盛り合わせと冷麺を注文した。サユキも冷麺を注文する。

店員は注文を繰り返すと店の奥へと消えていった。

「焼肉屋だと、ボックス席があるから。あまり誰かに聞かれたくはないだろ、逆向きに繰り返すなんて話は」

そういつて、壁をノックするように叩く。目隠しとしては役に立つだろうが、響く軽い音は、まるで壁が自分は地震の際には何のお役にも立てませんとアピールしているようだった。

このお店の耐震強度はとりあえず置いておくとして、カズタカの説明はもつともだ。ファーストフードにしるコーヒーシヨップにしる、隣の客の会話なんて筒抜けもいいところだ。それに、これからの時間はお店が込みだす時間だ。だが焼肉店ならまだお店が込みだすに

は少し早い。そういう意味でも、人に聞かれくない会話にはちよ
うどよかった。

「22歳って事は、大学生ですか？」

サユキは箸を止めてたずねる。

「いや、もう働いている。立派：かどうかわからないが、社会人だ」
ちよつと意外だった。という事はつまり、カズタカは高卒で働いて
いるという事になるのか。

「家族：は？」

家族には三日間の繰り返しを打ち明けないんですか？ そう聞こう
として、寸前でやめた。あまり今はその話をしたくない。もし彼の
未来から来たという話にボロが出た場合、自分の身の安全が保障さ
れないからだ。

「市内に実家があつてね。そこで両親と弟が暮らしている。就職し
てからは一人暮らしだから、あんまり顔あわせないよ。それに、今
こんな状況だし」

その話はしたくないというのに、どうしてそこにいきつくのか。何
か他の話しをしないと…、と慌てて話題を変えようとして

「…えつと、彼女はいないんですか？」

墓穴を掘った。

カズタカは少し驚いたような顔をしている。だが、驚き具合ならサ
ユキだつて負けてはいない。あえて弁解すれば、目の前の男に対す
る不信と信頼の間で精神的に不安定となっていた所に、急遽話題の
転換を求められた結果である。

決してカズタカに対して好意を抱いているとかそういう事は無い。
「彼女なら、いる」

決してカズタカに対して好意を抱いているとかそういう事は無い
はずだ。

嬉しそうに、少し恥ずかしそうに答えたカズタカの顔を見て、自分
の中の何かが凍り付いていく。そしてそんなサユキに気がつく様子

もなく

「就職してから付き合い始めたんだけどさ。俺が言うのもなんだけど、結構美人だよ」

聞いてもいないのにのろけだす。いや、話題を振ったのはサユキだ。そして自分で振ったから、会話を断ち切ることもできない。

「最近、会っていますか？」

その質問に、口に入れようとしていた冷麺の動きが一瞬とまる。

「……いや、会ってないよ。相手は今アメリカ留学中で、俺はこんな状況だから」

こんな状況。三日間を繰り返す。

しかも相手は海外留学中だという。一年間会っていないのだろう。そんな様子を語るカズタカの口調は今までと変わらないが、逆にそれが痛々しいほど悲しさをあらわしているような気がした。

もうそろそろ、本題に入ろう。話をしたくない、などと言ってられない。

相手のぼろに気がつかないように気をつける。気をつける向きが普通と逆だが仕方がない。

冷麺も食べ終わり、箸をおき、サユキは少し姿勢を正した。

その仕草で、ついに話が本題に入るといふ事がわかったのだろう。カズタカも箸を置いた。

「昨日あなたから預かった宝珠の事で聞きたいことがあるのですが」「珠？なに、あの宝珠を持ってるのか？」

そういつつテーブルに身を乗り出している。興奮気味なカズタカを見るのは初めてだった。

「ええ、昨日 あなたにとっては明日ですけど あなたに渡されませんでした。今日は持ってきていませんけど」

「…そうか。明日の俺は無事に珠を取ったのか。…一つ聞いても？」「何ですか？」

「俺がどうやってその珠を手に入れたのか、何か聞いているか？」
それはつまり、昨日俺が何をやったのか知っているか、という質問。
昨日の様子を思い出す。ガラスを破って飛び出してくるその姿。追
いかけてくる警備員。そして、彼自身が言った言葉。
すりむいた膝に自然と手をやる。

「…モールでビニールシートがかかっていた場所があったでしょう
？詳しくは知らないですが、あなたはそのガラスを破って飛び出
してきてきました。それに昨日のあなたには『強盗してきた』と言
われました」

実際にどうやったのかはともかく、少なくとも真つ当な手段で手に
入れたのではない事は分かる。そもそも展示物だ、入手できるはず
がない。それでもサユキの部屋にあるという事は、その入手手段が
真つ当ではないという事。ガラスを破っていた。警備員にも追われ
た。犯罪すれすれ、ですらない。犯罪である。証拠が無いからカズ
タカが犯人と断定はできないが、それでも重要参考人程度にはなる
だろう。

何か事情があるはずだ。

何か事情を知っているはずだ。

知りたいが、知ってはいけない事だろう。知れば何かしらの犯罪に
巻き込まれる事になる。それは決して、サユキの望む所ではない。

カズタカは暫く考える素振りを見せて

「…まあ、方法はともかく。明日の俺は無事、といえるかどうかは
ともかく珠を手にする事はできたわけだ」

「ええ、今は私が持っているんですけど…」

そして、サユキは一番気になっている事を聞いた。

「その珠、私はどうすればいいんですか？昨日の話では、日曜日カ
ズタカさんに渡せばいいみたいな事を言っていましたけど」

カズタカは、再び考え込む。

考え込むってどういう事だろう。何か難しい事をしないといけない
のか、それとも何も考えていなかったのか。サユキとしては、早く

珠を手放したい。何しろ盗品だ。だがカズタカの口から出た答えは「その珠をどうすればいいのか、正直俺もよく分からない」
「どうやらもう少しカズタカに付き合う羽目になりそうな答えだった。」

その答えを聞いて湧き上がった感情は、怒りだった。

「なんですか、そのよくわからないって」

その怒りを隠さずにぶつける。カズタカは

「俺は神様じゃない、わからない事だつてある。ただ、俺の経験からだ。日曜の午後十時にその宝珠が必要になるはず、という事だ」
残ったサラダを平らげてそう言う様子からは、すまないと思つ気持ちのかけらも感じられない。だがサユキはその言葉で怒りを忘れる。午後十時。そんな時間の縛りがあるなんて聞いていない。

「午後十時つて、何か理由があるんですか？」

「その話は聞いていないのか？ま、言つてしまうと俺の逆行と繰り返しに関係しているんだ。俺の一日の終わりは午後十時、どうしてもそれ以降起きていられないんだ。ものすごい眠気に襲われる。何をしても抵抗しきれない、眠るといふより気絶に近い。そして起きるのは翌朝七時頃だ」

つまり、カズタカは毎日九時間寝ているという事になる。

どれだけ健康児なんだ。最近の小学生だってそんな早寝する奴はいない。

「時間に関しては分かつたんですけど、場所は変わるんですか？」

「どこにいても必ず十時に気を失う。そして起きるのは自分の部屋ののだ」

つまりこのループは必ず自分の部屋から始まるという事。

そして、彼がいう日曜の午後十時。それは一番未来に近いタイミングで、さつきカズタカが言っていた事を考えると、

「つまり、日曜の夜十時頃にあなたの側に置いておけばいいと？」

「ただ俺が持っているだけじゃダメなんだ。できれば、傍にいて欲

しい。午後十時になった時に俺に何が起きるのか見届けて欲しいんだ。そのかわり場所は君の好きなところでいい」
つまり明日の夜十時にカズタカと一緒にいる事。
サユキは大きくため息をついて、期待と不安を押し隠した顔のカズタカに「わかりました」と言った。その程度の事はすでに覚悟している。違う意味で一夜を共にしてくれと言われたら間髪いれず断っていたところだが。

「じゃあ、相手の両親に会った事はあるんですか？」

「ああ。手持ちの中で一番いいスーツで行った」

真面目な話をして少し疲れたので話は雑談へと流れた。今は何の話かと言うと、カズタカの彼女の事だ。社会人の付き合いというのは高校生のサユキにとって未知の領域で、結婚なんてドラマの中の話だ。そんな彼女にとってカズタカは格好の獲物とも言えた。

彼が彼女の事で傷ついているのなら変に溜め込むより話したほうがいいはずだ、というのは彼女の心の中の言い訳で、もちろんカズタカの抱えている問題解決には何の関係も無い、120%サユキの好奇心だった。彼女だって、女子高生なのだ。

「やっぱり緊張しました？」

「それはな。入試テストとか、入社試験とか、卒研発表会とか、いろいろ緊張する場数は踏んできたつもりだったが、全く次元が違った」

サユキは高校入試を思い出す。そのときも緊張したが、そんなものの比じゃないのだろう。

「そんなにすごいんですか？」

そう聞くサユキに、カズタカはその時の緊張を思い出しているのだろう。すこし背筋を伸ばし顔をこわばらせて語ってくれた。

「ご両親のいる部屋のふすまを開けたら、両親は2人とも和服姿だった。」

母親のほうはニコニコ笑っていたけど、親父さんはなぜか口には半紙をくわえて、耳掻きの反対側みたいな奴持って抜き身の日本刀の手入れをしていた。話をする間も目を合わせてくれないし、刀も最後まで手放さなかった」

リアルで死ぬかと思っただよ、と乾いた笑顔で語る。だが、笑顔で聞けるような話ではない。

「彼女つてもしかして、ヤクザの一人娘ですか？」

「いや、大きな神社の神主の娘。だから、年末年始には巫女に早代わりだ」

話のポイントのみを抜粋すると、『日本刀』と『巫女』。この組み合わせがいいという人も世の中にはいるという話を思い出す。もしかしてカズタカもそんな人なのだろうか。

そんなサユキの疑いには気が付かずカズタカは話を続ける。

「でもよく信じたな、三日間を逆行して繰り返すなんて。普通なら信じないぞ」

「そうですね。昨日言っていた通り、モールの特設ホールが燃えましたから。信じないわけにはいかないですよ」

自分の頼みを聞き入れてもらえたからだろう、カズタカもサユキを信じたようだ。二人の間に打解けた空気が流れる。

「他には絶対に今日起きる事ってないからな。モールの火災を例えるのは最善手だ」

その言葉で昨日の会話を思い出す。サユキには昨日から気になってる事があつた。それは会話の中に出てきた一言。特に深い意味は無いのかもしれない、だがそれがどうしても忘れられない。

「…昨日のあなたが言っていた事で、一つ聞きたいことがあるんですけど」

「何だ？俺が答えられる事なら答えるが」

それは本当に些細な一言。言葉のあやかもしれないような、わずかな違和感。

昨日カズタカは言った。『普通の生活に戻るために色々なことをし

た。海外まで逃げたし

死にそんな人を助けたこともあった」

「繰り返しの間に、誰か死ぬところを見たんですか？」

それまで二人の間に流れていた、ゆったりとした空気が。

その一言で、一瞬凍りついた。

「…ああ、そうだ」

返事は酷く素っ気無く。

命の話なのに味気ない。

こつもはつきりと肯定されるとは思わなかったサユキは次の言葉が続けられず。

カズタカは、一人の女の子の話始める。

「どこの高校に通っているのかは知らない。もしかしたら君と同じ高校なのかも知れない。その子はいじめにあっていた。かなり陰湿に、執拗に。悩んだ末に学校に相談したが解決できず、逆にいじめはエスカレートする。そして耐え切れなくなった彼女は、電車に飛び込んだ」

まるで映画や小説のストーリーを紹介するような口調で特に気負った様子もなく、淡々と話す。

実際に人の命がかかっているとは思えない。

実際の人の命がかかっているとは思えない。

サユキは思わず尋ねてしまった。

「…それ、本当ですか？」

「ああ、本当だ」

この瞬間、時間を逆行して繰り返している事の真偽はどうでもよくなった。カズタカは昨日モールの火災を言った。それが予言であれ宣言であれ、実際に火事は起きた。今度は、人が死ぬという。それだけが重要だった。

「どうして…？」

「一人の小さな死では日数に誤差が出るからな。それに比べてモールの火災は確実に起きる。明日の俺が未来予言に使わなかった理由

も」

「違う！そうじゃない！」

カズタカの言葉をさえぎりながら思わず両手でテーブルを叩く。もうお昼のピークは過ぎてお客も減った静かな店内に大きな音が響き、店員の盗み見るような視線を感じるが無視した。声のポリウムも落とさない。

「どうして人が死ぬのにそんな他人事なんですか！？いつ起きるか分からなくてもいつか起きるのなら、それは止めないと！」
目に怒りを込めてカズタカを睨む。

サユキの行動に一瞬驚いたカズタカも、すぐに冷静を取り戻した。そして瞳には冷静を通り過ぎて冷めた色が浮かべて、

「ふん、一人死ぬくらいで騒ぐな」

感情のこもらない声で、静かにそういった。

「どうして他人事かって？当然だろう、他人だからだ。

知っているのか、全国で毎日どれくらいの人が死んでいるのか。事件事故病気、毎日誰かが死んで小さなニュースとなる。それをいちいち悲しみ悼んで生きてきたのか？違うだろう、そういう出来事を知りながら他人事として暮らしてきたのだろう？

それが正しいんだ。自分に関係ない他人の死に心を割いていたら暮らせない時代だ。外国の戦争で一人死のうが、どこかの火事で百人死のうが、近所で高校生が自殺しようが。他人なら、それはただの情報だ。気にすることはないし、気にしてはいけない。

ただ通り過ぎるだけの他人は、風景と同じだ」

冷めた声で、声以上に冷酷な事を言う。表情は鋼のようでさっきまで恥ずかしそうに笑顔を浮かべて彼女の話をしていた顔と同じだとは思えない。

そして、カズタカという事もわかる。それは悲しい事だけれど、間違いだとも思えない。だが今だけはカズタカの言葉にうなずくわけ

にはいかなかった。

「でも、今から行けばその子は助かるんでしょ！？だったら、助けられるなら助けなにと」

そういった時、カズタカはチラッと時計を見る。

それを見て気が付いた。時間が多少前後するとはいえ、いつ、どこで死んでしまうのか、それをカズタカは知っているはずだ。

「教えて。いつ、どこで、その子は…」

「知ってどうする？」

「当たり前でしょ、止めに行くわ！」

間髪いれずに答える。

しばらく見詰め合い、それは決してロマンチックなものではなく、火花が散りそうな睨み合いだった。視線をはずさないまま、カズタカが語りだす。

「君は、いじめられた事があるか？委員長なんてやるようなクラスの中心的存在にはそんな経験なんてないだろう」

それでも想像してみるといい。

集団生活の中での孤立。

叩きつけられる悪意。

誰も助けしてくれないという絶望。

その全てに理由が無いという恐怖。

「そして彼女は死を選ぶ。自らの命を絶つまで追い詰められた彼女を止める権利が、君にあるのか？決して安易な、生きているのが面倒だなんて理由じゃない。本当に嫌で、でもどうしようもなくて。

悩みに悩んで導き出した結論を、本当に邪魔できるのか？」

カズタカの言ういじめ、いや、クラス全員での拷問の風景が、サユキには分かる。十分に想像できるし、そういった事が実際にありえると理解できる。彼女だって、女子高生なのだ。

「…確かに、死を選ぶほど追い詰められた事はないです」

いじめを苦に若者が自殺。全国どこにでもあるニュース。

「今の話が嘘だって言うつもりもありません」

どのニュースも『いじめ』という三文字の裏で実際に何が起きていたのかまでは報道しない。そしてそれはとても放送できないような大人が考えているよりも陰湿で凄惨なものだという事も知っている。そんな拷問に八ヶ月もさらされて。そして死を選ぶとしても。それを『根性なし』と罵るのはやはり、大人だけだろう。いじめられるほうが悪い、などと馬鹿丸出しの理論を真顔でぬかす奴がいるが、彼らはわかっていない。理由のないいじめだって、確かに存在するのだ。

「でも」

それでも、止めたいと思う。

「私は、止めたいです」

いじめられるのは、死ぬほど辛いことでも 死んではいけない。

「死んじやったら、確かにいじめられる事はなくなります。でも、死んだらお終いじゃないですか。いじめられる事がなくなる。そして、この先高校を卒業することも、大学に入学することも、就職することも結婚することも！全部、一緒になくなっちゃうんです！いじめられてる時、いじめられてる本人はとても辛くて、これから先の人生をなしにしても逃げたいと思う事でしょうけど。でも、自分の『未来』をいじめと一緒に捨ててしまうのは、とてももったいない事なんです！

今まで辛い思いをしてきたからこそ、その子には明るい、幸福な未来があるはずですよ！絶対あるはずですよ！あります！だから今、死んじやダメなんです！

だから、止められる人が止めないと！行って、あなたはまだ死んじやダメって言うてあげないと！」

感情が高ぶり、何度もテーブルを叩いた。

そんなサユキを黙って、まるで観察するような冷たい顔でカズタカは見ている。

「だから、教えてください。その子が、何時に、どこで、死のうとするのか。絶対に、私が止めます」

それでもカズタカは何も答えず、暫くにらみ合いが続いて。

「アカリ」

そうカズタカがつぶやいた。

え？と聞き返すサユキに

「アカリ、という。その子の名前だ。場所は田辺駅」

田辺駅。それはここからだと三十分ほどかかる、地下鉄の駅だった。

「時間は、午後四時から五時の間。…、少し急いだほうがいいな」

サユキの腕時計は、午後三時四十五分を示していた。

5・土曜日・自殺少女

焼肉屋を飛び出して電車に乗り田辺駅に着くまで、二人は会話を交わさなかった。

カズタカはどこか不満そうで、サユキは自分が乗っている電車にアカリが飛び込むのではないかと緊張していたが、結局その心配は杞憂に終わった。

二人が田辺駅に着いたのは四時二十二分。そこはオーソドックスな地下鉄のホームで、一つのホームを挟むように上り線と下り線がついている。

自分たちの乗ってきた電車を見送って、

「さて、どうやらまだ飛び込んではいないらしい。ここからどうする？」

ようやくカズタカが口を開く。

「とにかく探しましょう。出来れば彼女の顔が分かる写真なんか見たいけれど……。せめてどこで飛び込むのか教えてください」

急いで駅まで来たはいいがサユキはアカリの顔を知らない。田辺駅のどのあたり　上り線なのか下り線なのか、ホームの中央なのかそれとも後方なのか　で飛び込むのかも知らなかった。

だがカズタカの答えは

「悪いが、それはできない」

「どうしてです！？　いまさらここで協力は出来ないなんて、どういうことですか？！」

事態が事態だ。思わずカズタカに噛み付いてしまう。そんなアカリにカズタカは、どこか冷め切った様子で淡々と答える。

「協力する事への俺の意思は関係ない。

そうだな、言い方を変えよう。アカリの姿が分かるような写真は持っていないし、どこで飛び込むのかは分からない」

そんな無責任な！と思うが、よく考えればカズタカの責任ではない。

どこで飛び込むかなど、飛び込む本人にしか分からない。

「それじゃあ五時までホームを見張りましょう。私は一番線を見張りますから、カズタカさんは二番線をお願いします」

それだけ言って一番線ホームの先端へと走り出す。飛び込むのならば電車のスピードが出ているホームの前方だろう、そう考えたためだ。当然カズタカは二番線の先頭、サユキの対角線上にいるはずだ。だが相手の姿が分からないというのは辛い。飛び込みそうな怪しい高校生がいたら大声を出して止めるしかない。

その時、風が吹き始める。ポロロンポロロンというチャイムの後「まもなく二番線に下り電車が参ります」と男性の合成音声告げる。カズタカの方だ。という事は、今は一番線を見張らなくてもいい。反対側のホームへ向かう。

風はますます強くなり、暗い闇の中からやがて二つの光が見えてくる。ホームの一番離れた場所からサユキの方を見ている人がいる。カズタカだ。だが今は見詰め合う状況にときめいている場合ではない。

休日の昼間という事で、そこそこの人はいる。そこそこで済んでいるのはこの駅が各駅停車しか止まらないからだ。その点は田辺駅に感謝すべきだろう。

だがサユキはホームに並んだ乗客を見て心の中で毒ついた。

アカリという名前の女子高生、という情報しかない。だから年頃の女の子を注意すればいいと思っていた。それしか見つける方法がない、と言ったほうが正しい。

そして、ホームにいる乗客の半分は『制服を着ている明らかに女子高生』と、『私服だがおそらく女子高生』で占めている。アカリという子がどうしてこの駅を選んだのか。それはおそらく学校から一番近いのだろう。女子高生が多くいても不思議ではない。

二つの光しか見えなかった電車は徐々にその姿を現し、運転手がはつきりと見えるようになり、暴風と騒音を引き連れてホームに滑り込んでくる。

その直前、そんな暴力の象徴に身を投げる 人はいなかった。何事もなかったかのように、全て予定調和のように電車はスピードを落とし、そして止まる。乗客を吐き出し、そして飲み込む様子は何の変哲もない駅の風景だ。

知らずに呼吸を止めていたようだ。息苦しさを覚え、大きく息を吐く。

一本でここまで緊張していたのでは神経が持たない。五時まではあと三十分以上ある。さらに（幸か不幸か）それまでに何も起きなければ、もう少し延長しないといけない。

そんな弱気を大きく吸いこんだ息と一緒に内側へ押し込める。何があっても、助ける。自分が手を伸ばす事で助かる命があるのなら、それは助けなくてはいけない。見つけにくくても見つけ出す。身が持たないなんて事は、助け終わった後に考えればいい。

「絶対に、死なせるものか」
目の前で動き出した電車に背を向けて、決意を新たにそうつぶやいた。

今回も違った。

二番線から発車する電車の脇で大きく息をつく。
ホームにぶら下がっている時計はもうすぐ五時になる。アカリを探し始めてから数本の電車が過ぎた。

一度も見た事のない人を探すという事がこれほど大変だとは思わなかった。せめて特徴でも分かれば…と思うが、カズタカに言わせるとそんな分かりやすい特徴はないらしい。制服を着た女子高生がまたぱらぱらとホームに現れる。彼女たちの拳動をホームの端から観察する。顔が分からないため、拳動や雰囲気から探し出すしかない。まるで獲物を狙う狩人のような眼光で乗客を睨むサユキに

「あの、先ほどからどうかしましたか？」
そっと声がかかる。

人の生き死にかかっているんだ邪魔するな、という意味も込めて鋭い眼光のまま振り向くと、そこにはサユキより少し年上だと思われる若い男の駅員が立っていた。

今のサユキはホームにいるのに電車に乗らず、乗客を鋭い眼光で睨んでいる挙動不審者だ。駅員が声をかけるのも当然といえる。

「今ちよつと込み入っていて大変なんです邪魔しないでください」という言葉がの喉まででかかって、冷静に考える。

駅員。…使えるのではないか。

「実は、親友から田辺駅で飛び込み自殺するってメールが来たんです。止めようと思つて見張っているんですけど、まだ見つからなくて。放送でその子呼び出してもらつて出来ますか!？」

考えるより先に言葉が出ていた。サユキの真剣な口調に気圧され一瞬たじろいだ駅員も、

「私の一存では決められません、ですがすぐに駅長に話をしてみます。呼び出し許可が下り次第、すぐに放送を入れますから」

サユキの必死さが伝わったのだろう、それだけ言つて駆け出していく。

助けたいのなら、誰かに協力してもらつてもらう事はとても大切で、それが駅員ともなれば強力な味方となってくれるはずだ。

その時、ポロロンポロロンというチャイムの後「まもなく、一番線を快速電車が通過します。危ないですから黄色い線の内側にお下がってください」という放送がはいる。

それを聞いてハツとした。

田辺駅は各駅しか停車しない。だから乗客もそう多くないとさつき感謝したばかりだ。

だが言い換えるとそれは、各駅停車以外は通過するという事。

そして、通過するならば電車の速度はホームのどこでも変わらない。つまり、どこで飛び込んでも死ぬ。必ずしもホームの先頭である必要はないのだ。

ホームの後ろにはカズタカが、前には自分がいる。一番手薄となる

のは、ホーム中央！

自分の後ろから風と轟音が近づいてくる、そんなプレッシャーを感じながらホーム中央の乗客を観察しようとしたとき、一人の女子高生に目がとまった。

小柄な女の子で、髪型はショートカット。他の子と同じような制服を着ている。

周りの女子高生は2、3人のグループでおしゃべりをしているが、彼女は一人だった。遠目から見ても元気がないのが分かる。ずつとうつむいたままで、さらによく見ると足元がおぼつかない様子だ。そしてそのまま黄色い線まで進む。

まるでホームの放送に導かれるように　まるで轟音と暴風に呼ばれるように。

サユキは走り出す。直感した。彼女が、アカリだ。

自分の後ろから吹く風が強くなり、音が大きくなる。それはすぐ後ろまで来ている巨大な鉄の塊が自分の存在を誇示するかのようで、暴風を引き連れた巨大な死神を連想させた。そしてこのままでは、それは比喩ではなくなる。

通過列車を黄色い線の上で待つ人などいない。だからアカリの動きは目立った。ホームの反対側からカズタカもスタートを切っている。アカリがいる位置は、ちょうど駅の中央。サユキとカズタカの間地点。

アカリはうつむいたまま電車を待つ。だがそれは乗るためではない。次の駅よりもつと遠くへ行くためだ。

そんな簡単に死なせない！もう電車は自分のすぐ後ろまで迫っている。アカリまではまだ距離がある。周囲の雑音が消えて、後ろから迫る轟音のみが耳につき、その音から正確な電車の位置がわかる。きつとアドレナリンの過剰分泌だろう、今の自分に必要な情報のみを的確に集めてくれる。

不意にアカリはサユキのほう、サユキの後ろに迫っている電車を見た。その時のアカリの表情はとてとても昏い　笑顔だった。

そして次に、電車と競うように走るサユキと目が合う。必死で走るサユキを見て『どうしてあの人はホームを全力疾走しているのだろう?』という顔をする。まさか自分を止めようとして走っているとは思っていない。

昨日といい今日といい、カズタカとかかわってから走ることが多い。昨日の全力走行のせいで今日は筋肉痛とか、そういった事も全部忘れる。今はただ、一瞬でも早くアカリのもとへ。今ならまだ助けられる。

アカリはもうサユキを見てはいない。彼女が見ているものは、この辛い地獄から自分を連れ去ってくれる巨大な鉄の天使。昏い恍惚とした顔で電車を見るその顔は、とても正気とは思えない。

アカリまであと三メートルの所で、電車はサユキを追い抜く。

自分の隣を、音と風を撒き散らしながら追い抜く様子を、サユキはスローモーションで見た。自分を含め全てがゆっくりと進む時間の中で、なおもアカリを目指し走る。

「ダメ」

そのこの電車、行つてはダメ。そのままでは一人の女の子が悲しみを抱えながら死んでしまう。

電車は、アカリまであと二メートル。

「ダメ」

目の前の女の子、行つてはダメ。一步を踏み出すと確かにここからは逃げられるけど、あなたにはまだ先がある。

電車は、アカリまで一メートル。

アカリは目を閉じ、フラッと体を宙に

「だめええええっっ!」

一瞬アカリの動きが止まり、

サユキはアカリに抱きつくようにして倒れこむのと、アカリの目の前を電車が通過するのは同時だった。

アカリの上に来るで庇うように覆いかぶさりながら、電車が過ぎるのを待つ。そんな彼女たちのすぐそばを電車は通過してく。強い風

と音は、まるでアカリを連れて行けなかった事を恨む悪魔の声にも聞こえた。

電車が過ぎてもサユキは立ち上がれずにいた。ドキドキしているのは自分の心臓か、それとも抱き込んだアカリの心臓か分からない。その時「立てるか？」と声がかかる。

顔を上げると、すぐそばにカズタカが立っていた。そこでようやく周囲のざわめきが聞こえるようになる。

無言でのろのろと立ち上がる。

サユキの下には、驚いた顔をした女子高生。何が起きたのか理解できていないらしい。

「大丈夫？どこか打ったりしてない？」

サユキは声をかけながら手を差し伸べる。返事は無かったが、それでもアカリは差し出された手を掴み立ち上がる。

そんな二人は当然周囲の注目を集めていて、彼女たちを遠巻きに眺める人達の中にはアカリと同じ制服を着た子もいた。

そんな人の輪を掻き分けて先ほどの駅員がやってくる。

「遅れてすいません、駅長の許可が下りました！ですので、呼び出したい友達の名前を教えてくださいませんか？」

サユキはアカリと目を合わせて

「えっと、アカリって言います。そうでしょ、アカリ？」

アカリは、どうして知っているの？とあらためて驚いた顔をするのだった。

三人は若い駅員に連れられて、駅員室の奥にある六畳ほどの和室へと通された。目の前の四角いテーブルにはお茶まで準備されていて、温かそうな湯気をたてている。

若い駅員は駅長の所へ行っている。なんでもサユキを「事故を未然

に防いだ功労者」として報告しているらしい。後日感謝状が届くかもしれない。

だがアカリにはそれはどうでもいいことだ。今この場に駅員がいてはこの後の話が面倒になる。アカリとは親友だとして説明しているが実際に会うのは始めてで、しかも説明の中ではカズタカの話もしないといけないだろう。だから肝心な話は駅員不在の今のうちに済ませたかった。

「さて、会うのははじめてね。はじめましてアカリさん。私はサユキっていうの」

よろしくね、というのがアカリからは返事がない。うつむいてテーブルを見ている。

狭い和室の中でサユキとアカリは向かい合って座っているのだから、声が聞こえないはずがない。サユキの隣で黙りこくっているカズタカをさして

「この人はカズタカ。実は彼からあなたが、電車に飛び込みそうだった聞いてね。ホームですっと見張っていたの」

その言葉にアカリは顔を上げる。そうしてカズタカとサユキをみて「…どうして」

周囲の雑音にかき消されてしまうほどに小さく弱い、これがアカリの第一声だった。

聞き取りにくいのは声の大きさだけではない。声に『張り』がない。存在感、伝えたい事、意思…。そういったものがごっそりと抜け落ちた、空っぽの声だった。

どうして、とアカリは言った。どうして自分が今日この駅で電車に飛び込む事がわかったのか。サユキはその問いにどう答えるべきか、カズタカを見る。

だがカズタカは

『助けたのは、お前だ。ならば最後までお前が責任をもて』
厳しい目がそう言っていた。

焼肉屋でカズタカはアカリを助けることにあまり乗り気ではなかつ

た事を思い出す。電車にはねられるのを止めただけじゃ、彼女を救った事にはならないという事か。

「実はカズタカの時間の流れが普通の人と違って。未来から過去へと流れているんですって。しかも三連休を繰り返しているっていうの。驚きよね」

そんな訳であなたの事がわかったのよ、と。サラリとカズタカの秘密をばらす。

さすがにそれを聞いてアカリの顔に怪訝そうな色が浮かぶ。が、それも一瞬。すぐに無表情に戻る。

そして放った言葉は

「…どうして」

先ほどと同じ言葉。

「どうしてそんな嘘をつくか？でもね、これは本当らしいのよ。あなたをこうして助けられたのがその…」

「どうして、助けたんですか？」

サユキの言葉を途中でさえぎった今度の言葉には、はっきりと意志が込められている。それは、拒絶、そして恨み。

助けてくれたのですか、ではなく、助けたんですか。この二つの言葉の違いは大きい。

部屋の気温が下がったような錯覚を受ける。壁を隔てた駅の喧騒が聞こえる。

それだけ言っつて、アカリはまたうつむいてしまった。カズタカは相変わらず厳しい顔をしている。

どうして、助けたんですか？

そう言われる事も、予想していた。理由はどうであれ、アカリ本人がしたい事を邪魔したのだ。だが実際言われると、その言葉の重さにつぶされそうになる。

ドウシテ、タスケタノ？

「…本当にあなた、死んでいいの？ここで電車に飛び込んで、それで終わりにしちゃっていいの？」

アカリからの返事はない。何も聞こえなかったかのようにずっとつむいたままだ。そう長くない髪のため、顔が隠れてしまうような事はなく、その隙間からは彼女が目を閉じていることがわかる。

「サユキ、さん。どうして私が…飛び込もうとしたのか、知っていますか？」

再びアカリから声が放たれたのは、サユキが質問してから一体どれくらい経ってからだろう。

消え去りそうなその声に、先ほどと違う色が混ざっていることにサユキは気がついた。

これは……怒り？

「え、ええ。それもカズタカさんから聞いているわ。いじめにあってるって」

「あなたは、いじめを受けたことがないでしょう」

顔はやはりうつむいたまま。だが今までにないはつきりとした断定口調で、アカリは言い切った。

「…だから、私を助けるなんて事ができたんです」

そうして、アカリはサユキを見る。いや、睨むといったほうが正しい。

その瞳に、ホームで電車を見ていた昏い色は、もうない。今は死人のような冷たさと、悪魔のような憎しみの熱さが渦を巻いている。

「いじめられた事のないあなたは、私が、どういう気持ちで今まで生きてきたか分からないでしょう。」

学校へ行ったら突然友達に無視されたときの気持ちが分かりますか？わざと聞こえるように悪口を言われたときの気持ちが分かりますか？

朝教室に入って机が倒されていたときの気持ちが分かりますか？

クラスの人が登校してくるたびにいじめをする人じゃないかとびくびくする気持ちは？

クラスの人に声をかけられるたびに緊張する気持ちは？目の前で携帯のアドレス帳から番号を削除されたときの気持ちは？

親友だと信じていた子に相談したら拒絶されたときの絶望は？制服

のままプールに突き落とされる衝撃は？服が乾くまで更衣室で隠れていなければいけない惨めさは？」

徐々に、声に熱がこもり始める。

それは、地獄でうめく咎人の苦しみを想像させた。

「先生にはお前が悪いと言われた、親友だと思っていた人にはもう話しかけないでと言われた。机は教室の隅においやられて誰も話しかけてこない。笑い声が聞こえると自分の事を笑っている気がする。体育の授業は怖い、運動って言いながら何をされるか分からないから。国語の時間は怖い、声を出さないといけないから。」

選択科目は怖い、みんなと一緒に教室移動すると嫌がられるからそれは、地獄そのもの。

一秒ずつ心を壊される、いつ終わるとも知れない地獄。身に覚えのない苦しみを味わうと言う意味では、それは地獄以上の地獄だろう。

「休んだら休み明けに何をされるか分からない、何より家族には心配かけたくない。お父さんは優しくてお母さんはしつかり者で弟はお調子者で明るくて。そして、三人とも私にとっても優しくて。だから、ずっと隠してた。私が学校でこんなことになってるって。」

ははは、クラスの人はね、痣が残るような事はしないの。だから家族にも隠せてた。今まではね」

次の時間は美術だった。

他の人がみんな美術室に行ってから、最後に一人で教室を後にする。そうやって一人で動く事にももう慣れた。

ゆっくりと歩く。授業の開始まではまだ時間がある。あのクラスのざわめきが、ただひたすらに怖い。だからなるべく授業開始直前に美術室に着くようにする。

「あら、アカリさん。もうすぐ授業始まるわよ」

美術室の直前で後ろから先生に追いつかれる。二人で並んで、ざわめく美術室へと入っていく。

「ほらほら授業はじめるわよー、はい委員長号令」

まだざわつく室内の壁際を通過して一番後ろの席へと向かう。

これが彼女の狙っていた理想の展開。先生と一緒に美術室に入れば、それと同時に授業開始となる。教室のざわめきにさらされる事がない。

今日はラッキーかも。そんなことを、考えてしまった。

普通の教科と違い美術というのは比較的自由が許される教科である。もちろん担当教員の個性によるところが大きい。アカリの美術教師はそんな自由を最大限に使うタイプだった。

だからその日、

「今日は、授業終了までになんでもいいから一つ作品を仕上げる事」なんて課題が出されたとしても、特に驚きはしなかった。

何をしてもいい！という期待に教室中がざわめく中、アカリだけは沈んだ顔をする。

黙って時間が終わるまで座り続けるほうが楽だ。そんな理由で数学は好きだった。ただ座って問題を解く。出てきた答えに感情を込める必要がない。

作品を仕上げるのに美術室から出てもいいのか、という問いに「いいけどあんまり騒ぐなよー」という投げやりな答えが返ってきてから、続々と生徒は外へ繰り出している。

サユキもなるべく人のいないところへ行こうとして、席を立つ。その時

「サユキー、どっか行くの？じゃあ一緒にいこうよ」

瞬間、全身が冷たくなり、吐き気を覚える。嗜虐の響きがにじみ出ているその言葉に振り返ると、そこにはクラスで最も顔をあわせたくない女子とその取り巻き達。四人で八個の目が、サユキを縛り付ける。

何と答えたのかは覚えていない。ただ、あつという間に周りを囲まれ、美術室から連れ出された。授業中の廊下を五人で歩く。その間、サユキを含め回りの女子は何も言わなかった。これから何をされる

のか、何をさせられるのか。不安と恐怖で気分が悪くなる。それぞ
れの教室の前を通るたび中から先生の説明の音が聞こえる。扉を隔
てた中ではみな真面目に授業を受けていて、まるで今の自分とは別
世界のようなのだ。

そうして連れてこられたのは校舎の裏。学校外週の木で外からは
見られず、校庭からは校舎が邪魔となり、校舎からは死角となつて
いる地点。周りにクラスメイトの姿はない。誰もこんなところで美
術の課題を仕上げようとは思わないだろう。

「今日の美術の時間って、何を作ってもいいんだよねー。みんなど
つかで絵を描くって言うんだけど、それじゃ面白くないでしょ。そ
れでね、私達わたしいい事考えたの！」

彼女達はニヤニヤと笑っている。一人一人顔が違うはずなのに、な
ぜかアカリには同じ顔に見えた。

「ほら、絵って二次元でしょ。やっぱり私達わたしくらいになると、絵じゃ
満足しないわけよ」

そうして、取り巻きの二人が左右からサユキの腕を抑える。

それは今までにない、完全な拘束だった。無言で身をよじって抵抗
するが、腕を開放してくれる気配もない。そんなサユキを見て彼女
たちの顔に嬉しそうな笑顔が浮かぶ。

「これからは、彫刻よ。絵なんて時代遅れ。三次元で思い出を残そ
うってね」

そういいながら近づくりーダー格が持っているのは、木工用ボンド。
きつと美術室から持ち出したのだらう、教材用の大きなヤツだ。

彼女を取り囲んだ四人は、弱い者をいたぶる喜びに顔をゆがませて
いる。それはとても人間とは思えない、悪魔のような笑顔。

「やだ、やめて…」

出せた声は、かすれてとても小さく。大きな声が出ない。

体を左右に揺らす程度では両腕の拘束は解けない。大暴れする事
もできない。

そんなサユキの抵抗は彼女たちをさらに喜ばせてしまったらしい。

「ちょっとそんなに嫌がることないじゃない」

リーダー格のボンドを持った彼女が目の前に立つ。

恐ろしさで、声も出せない。動く事もできない。

ただ、相手の目を見る。やめてと、声にならない声で抵抗する。

「私達がやるうとしてしているのは、美術の課題だよ？主役はアカリじゃないと出来ないって思ってるからここにつれてきたんだから。」

そんなに嫌がっているとまるで「ボンドのキャップをあける。中身が詰まった容器を両手で掲げた。自分の頭に向けられた吐出口は、今にも中身が出てこようとしている。その姿はともグロテスクで。

ボンドを掲げた彼女は、アカリの目に絶望が浮かぶのを見逃さなかった。

「ワタシタチガ、イジメテルミタイジャン…！」

そういいながら両手を握る。

アカリはその時の事をよく覚えていない。

とっさに目を閉じて顔をそむける。頭を庇おうとしたが両腕は押さえつけられていた。顔へはかからなかったが、左側の髪の毛にボンドが張り付いている。

両腕を押さえていた二人が突然アカリを突き飛ばす。抵抗も出来ず地面に倒れこむ彼女をみて、周りの女子は心底嬉しそうに笑っている。

「どう、芸術のモデルになった感想は！？」

誰がそう聞いたのかはわからない。それに答える代わりに、必死で手でボンドを落とそうとする。

そんなサクキにリーダー格の子が近づいていく。

まだ何かされる。それが分かっているが抵抗は出来ない。

突然前髪を掴まれて顔を上げさせられる。すぐ目の前、息が吹きかかる距離に悪魔のような笑顔とボンドの吐出口を見た。

「バカだねえ、あんたは彫刻なんだよ！？」

顔を塗らないでどうするのよ！！」

本当に怖かった。今向けられた嘲笑が、クラスには自分の味方がいない事が、そして、たとえ今は彼女たちの会話の中だけだとしても、いずれそれは現実になることが。恐怖で震える足を、恐怖で無理やり動かす。それは見るものがいれば惨めと言わざるを得ないような、敗走だった。

彼女の高校には運動部の生徒が汗を流すためのシャワー室がある。アカリは運動部ではないが、場所は知っている。今は授業中という事もあり、利用している生徒はいない。

タオルは持つていないがとにかく洗い流す事が先決だ。絶対に落とさないといけない。

「ハア、ハア。早く、早く…」

服を脱ぎ、シャワーの下に立つ。右目が開けないのがもどかしい。蛇口をひねると勢いよく水が出てきた。お湯になるのを待たず、顔に付いたポンドを手でこすり落とす。粘ついた感覚が気持ち悪い。それでもこすり続けると、だんだんと右目が使えるようになってくる。

しばらくこすり続け、薄く膜が張ったような感覚だけは残ったが、顔に付いたポンドはもう見えなくなった。

次に髪をすすぐ。もう水はお湯へと変わり彼女の足元から湯気を立てているが、髪に付いたポンドはなかなか落ちなかった。一本一本の隙間に入り込んでいて、こすり落とせない。

「落ちて、落ちてよ…」

お湯の勢いを強める。

手でこすればこするほど、ポンドは広がり髪にまとわり付く。

まるで絶対に逃がさないというような意思を持っているかのように。

どんなに頑張っても振り払えない。

どんなに頑張っても振りほどけない。

どんなに頑張っても、逃げられない。

狂ったように髪をかきむしる。肩の下ほどまでであった髪の毛は、お湯とポンドで乱れている。

「だめ、落とさないよ。落とさないよ……」

ポンドが髪に付いたままでは、まずい。

そのまま帰ることになるのは、まずい。

「落ちて……。落ちてっ……！」

なぜなら、家族がそれを見つけてしまうから。

娘の髪にポンドが付いているのを見逃すような両親ではない。姉の髪にポンドが付いているのを見過ごすような弟ではない。このままでは家族に、いじめがばれてしまう。

それはまずい。とてもまずい。

自分がいじめられているという事がわかれば家族は、驚き、悲しむ。自分のせいで、世界で一番大切な家族に悲しい顔はさせたくない。

だから、今すぐここでこの白くて臭いネバネバを落とさないといけないのにどうして髪にまとわり付いて離れないどうしても離れないどうして本当をお願い剥がれて取れてもう嫌ごめんなさいだから早く取れて取れてそうじゃないと家族が家族にばれちゃう！！

ブチブチツという衝撃を、頭と、むやみに動かしていた右手で感じた。呆然と右手を見るとそこには、一房の髪。うつすらと白いポンドでコーティングされた、自分の体の一部だったもの。

自分で自分を傷つけてしまった。気が付くと、ひざを抱え背を丸めて泣いていた。背中に土砂降りのようにシャワーが降り注ぐ。

言葉による攻撃、態度による差別。それは跡が残らない。だから隠せた。

だが今日は違う。今はもう分かっている、この髪の毛に付いたポンドは落とせない。好きだった髪の毛も、今では無残な姿になっている。

もう、家族に隠す事はできない。

今日家に帰ると、家族は啞然とするだろう。当然、何があったのか聞いてくる。

その時、自分がどういう行動を取るのか分からない。何も言わず部屋にこもるか、それとも泣き出してしまつか。そんな数時間後の自分を想像して悲しくなる。それは自分が惨めだからではなく、家族の悲しむ顔が浮かんでしまったから。

そんな顔をさせてしまふ家族に申し訳なくて。

そんな顔をさせる自分が情けなくて。

そんな弱い自分が嫌になって。

今までこらえていたタガが外れたかのように、泣く。生ぬるいお湯に打たれながら泣く。

自分とクラスを呪い、声を上げ、泣く。

シャワーの音にかき消され、その叫びが誰かの耳に届く事は無かった。

6・土曜日・助ける意味

アカリが口を閉ざしたあと、サユキは何も言えなかった。

彼女の口から語られた醜いじめの実態。その話を聴いただけで気分が悪くなり、名も知らぬ彼女のクラスメイトに怒りを感じる。

しゃべって落ち着いたからだろうか。アカリから怒りの気配は消えて、その瞳は再び深く沈んだ色となる。

「分かりましたか。これが私が受けたこと。昨日までの私の日常です」

そういつてアカリは髪に手をやる。ショートヘアだと思ったそれは、長さもバランスも歪だった。

「それじゃあ、その髪は…」

「自分で切りました。まさかポンドをくつつけたまま外は歩けませんから」

そういつて笑う。血の涙を流しているかのような笑い顔だった。

「でも、やっぱり髪の毛を切ったら言い訳できないじゃないですか。だから昨日は家に帰っていません。お母さんには友達の家泊まるって言いました。でも、今日も外泊というわけにはいきません。そして、家に帰れば家族にばれてしまいます。だから、もう…。今日が、限界なんです」

だから、死なせてください。

最後にそういつて、口を閉ざす。準備してもらったお茶は、もうすっかり冷めてしまった。

十七年生きただけで死を望んだアカリに、そんな彼女とは別世界を生きてきたサユキの言葉は届かないだろう。

それでも、

「…私と同一年のあなたがそこまで強く死を望むのだから、私の言葉じゃ説得力がないかもしれない」

それでも、サユキは語りだす。ここで黙っていたらアカリは死んで

しまう。それだけはダメだ。絶対にダメだ。

「確かに私はいじめられた事はない。いじめた事も、ない。あなたには信じられないかもしれないけれど、私のいたクラスではいじめが無かった。いえ、絶対にさせなかった」

本人が死を望んでいるのに助けるのはエゴだ、と非難されたとしても、絶対に止める。

生きていれば、必ずいい事がある。ふと、あの時死ななくてよかったと思えるときが来る。

「いじめがどんなに卑怯で卑劣なことか、私は上辺だけしか知らないのかもしれない。あなたに言わせれば、そんな程度で自分に干渉するなと言われるかもしれない。」

けれど、それでも言わせてもらう、絶対に、死んじゃダメって。まだ出来ることがあるうちに、希望が残っているうちに、諦めて死んでしまうなんて絶対にダメ」

アカリがそんな一瞬を迎えられるのなら。例え恨まれたとしても、絶対にここで彼女を食い止める！

「……いじめられてもいないのに、知ったような口を利かないください。あなたは本当に死にたくなるような、いえ、そんな気も起きなくなるくらい絶望したことがないでしょう。それならば好き勝手言えますよ」

不ぞろいな髪の間からサユキを睨みつけるその目は、嫉妬や妬みに満ちている。

「学校にいつて、毎日友達と楽しく話して。嫌いな授業や嫌いな教師の事ですら友達と笑いあって、放課後には部活をやる。そんな生活しか送ってきていないあなたみたいな人に、私の気持ちが分かるはずがない！」

アカリにとってサユキの生活、普通の生活は憧れなのだろう。そんな普通に憧れを抱いてしまうほど彼女は追い詰められている。そんな憎しみと狂気に満ちた視線に射抜かれても、もうサユキは動じなかった。

「そうね、私はいじめをうけた事もさせた事も無い。だからあなたがどういう苦しみを味わっているのか、想像することは出来ても実感することはできない。きっと私が想像する以上の、苦しみだと思っ」

「だと思っ、じゃないんです！私のもっ、それを四月から受けている！毎日毎日！それを簡単に想像できるなんて言わないで！あなたが私と同じ立場になったら絶対に、私と同じように…終わりを選ぶアカリの計画では、今頃は全てが終わっていたはずだ。死を選び実行するというのは大変なことだ。アカリは文字通り死ぬ気で気力を搾り出し、電車へと一歩を踏み出そうとして、それを見知らぬ他人に邪魔をされた。だから怒るのは当然で、今のアカリはサユキの事を救い主ではなく地獄に引きとどめる悪魔だと思っている。アカリのサユキに対する言動は、むしろ自然な事だった。

そんな恨みと妬みの嵐に対して
「私と、同じですって？」

サユキは心の底から同情し

「馬鹿にしないで。私は自殺なんてしない」

それ故、一歩も引かずに立ち向かう。

そのあまりにも直接的な一言に、アカリは言葉を失う。

「私と同じ、ですって？」

サユキはもう一度繰り返す。

「例えば私とあなたが同じようにいじめられたとしても、私は今のあなたと同じ方法は選ばない。これだけは断言できる」

「そんな事は、ない。実際に経験しないと、この辛さは分からないです」

先ほどまでの荒々しい口調はなくなつたが、声の裏にある本質は変わっていない。空っぽの声、まるで暗黒の宇宙空間のように冷たく、物質など何もないような、大切なものが抜け落ちた声。そんなアカリに対して、

「いいえ、だつてあなたにはまだやるべき事がある。私にはそれが分かるし、だからあなたと同じにはならない」

サユキは堂々と、アカリに残されている道があると宣言する。

反論しようとしたアカリの口調が止まる。それはサユキの言葉が予想外だったからか。

それとも、アカリ自身どこかでそのことに気が付いていたからか。アカリの沈黙は今までのものと違い、何か自分の中で答えを探そうとするものだった。

「私が、するべきこと？そんなことが今もあるっていふんですか？」

「あなたは家族を心配させないために、いじめられていることを隠していた。それはとてもすごい事で、家族を大切に思うことはえらいと思う。」

でも、私ならそうはしない。本当に、自殺をするほど追い詰められたら 自殺する前に、家族に相談する」

それはアカリがしている事と正反対。

「もしあなたが自殺したら、それを知った家族はどう思う？きっとこう思うわ、」

どうして、自分達に相談してくれなかったのか、自分達はアカリに信用されていなかったんだ、ってね。

家族に黙って死を選ぶ、それは、大切だつて言つてた家族を結局信用していなかったということでしょう？」

家族に対し、隠すのではなく、告白する。

「本当に大切に信頼できる家族なら、全てを打ち明けて相談するべきなのよ。」

そして、それは家族だけじゃない。学校だつてそう。担任に拒絶されたら違う教師に、クラスメイトに拒否されたら違う友達に、それでもダメなら教育委員会でもいじめ相談室でも！一人で抱え込んで、絶対に解決しない！時間がいじめをなくならせる事はあるかもしれない、けれどあなたが受けた傷は、そのままになつてしまう。

それは解消であって解決じゃない！」

一人で悩む事は解決にならない。

問題が一人で解決できなければ、信頼できる仲間、友達、家族に打ち明けるべきだ。

問題につぶされたとき、迷惑を受けて悲しむのはそれを見ている周りの人なのだから。

「今日だって、カズタカさんが私に話したからあなたを助けられた。駅員さんに話したからこの部屋が使えて今あなたの話を聞くことができる。どれも、みんなに協力してもらったから。私やカズタカさん一人の力では、ここまでできなかった」

今この場にいられる事がみんなに協力を頼んだ結果。誰一人かけても、この結果は得られなかっただろう。

「あなたは辛い仕打ちのせいで人が信用できなくなっている。だからこそ、せめて無条件で信用している家族には全てを話してあげて。それは今のアカリからは最も遠い選択。そして、本当は最初にするべき事。」

暫くアカリは何かを考えているようだった。

「今更、何を言えればいいのかわからない……」

それは、初めて聞くアカリの弱くて繊細な、だけれどちゃんと彼女の色の付いた声だった。

「大丈夫、私達に言ったじゃない。あの通り話せば大丈夫よ。」

もし言葉にならなければ、大声で泣けばいい。あなたが大切だと思っっている人はきつと、あなたを大切だと思ってくれている。そしてその人は、あなたを助けてくれるから。

アカリはうつむいて黙っている。だがそれは今までの沈黙とは違い、何かを考えているようだった。死に向かう覚悟の沈黙ではなく、新たに示された道、家族に全てを話すという道について、悩んでいるようだった。

自分の言えることは言った。そしてアカリにはそれが届いている。この後アカリ自信がどういう選択をするのか、それは分からない。サユキにできる事は、待つ事だけ

「そうだ、携帯を出して」

一つ思いついたことがあった。思いついたと同時に、口が動いていた。

アカリは辛そうな顔をしながら、まるで万引きした商品を差し出すようにして携帯を出す。それは白の折りたたみ式で、全体に丸みを帯びたデザインになっている。

アカリの表情は、暗く硬い。目の前の携帯がとても恐ろしい物だとも言うような、怯えとも取れる顔をしていた。それもそうだろう、彼女が受けてきた仕打ちの中には、この機械がかかわっていたものも少なくないはずだ。ここから吐き出される言葉が、これが受け取る文章がどれだけ彼女の心を傷つけたのか、それはいまのアカリの顔をみれば十分想像できた。

「いい、090…」

それ以上アカリの顔を見るのが辛くて、これ以上アカリにそんな顔をさせるのが嫌で、サユキは十一桁の番号を明るい口調で言う。そうして最後に

「それ私の番号だからね、ちゃんと登録してよ」

と付け加えた。アカリは驚いて呆然としている。今の彼女にとって携帯は自分を傷つける窓口でしかなかったからだ。

「ほら、ポーっとしてないで！」

サユキの弾むような、せかすような声でアカリは現実に戻る。目の前のサユキは、何かを待っているように携帯を持っている。

「早くかけてよ、そうしないと、アカリの番号わからないでしょ！」それは、信頼関係の第一歩。お互いが、いつでも連絡が取れるという事。

辛いとき、嬉しいとき、悲しいとき。この小さな機械で、誰かと繋がる事が出来る。その鍵が、十一桁の数字だった。

今教えられた番号を表示させ、通話ボタンを押す。数秒のタイムラグの後、サユキの手の中で電話が振動する。

それを確認して、アカリは通話を切るうかと思った。番号を教えるだけならば、ワンコールで十分だからだ。

だがサユキは、振動している携帯を開いて耳に当てる。その目は『あなたも耳に当ててみて』そう語りかけていた。アカリはただ言われたとおり、携帯を耳に当てる。サユキが通話ボタンを押して、二つの機械が繋がった。

「もしもし、アカリ？」

目の前と、受話器から同時に聞こえてくる声。

なにも答えられず、ただ受話器を持っているだけのアカリにかまわずサユキは

「これで私とあなたは他人じゃない。あなたが死んで悲しむ人が一人だけ増えたって事、わすれないでね」

嬉しそうに、少し恥ずかしそうに言って、電話を切る。

この数ヶ月、携帯から聞こえてくるのは、実に覚えの無い抽象や罵声、根も葉もない噂。それはアカリの心を切り裂くナイフで、だから携帯が怖かった。携帯の着信音を聞くとビクツとする、そんな癖までついた。自分からかける相手もいなくなった、そんな携帯電話が、再び輝きだす。

アカリは受話器を握り締めたまま、涙が止まらなかった。

サユキとアカリの話が終わってから、駅長と若い駅員を含めた話し合いが行われた。

アカリはまず電車に飛び込もうとした事を駅長に詫びた。駅としても大事にはならなかったため、アカリにはお咎めがないということだった。

そして成り行きの一部始終　もちろんカズタカが未来から来たという話はせず、サユキとアカリが親友だという設定にしたが　を話し

て聞かせた。

駅長と駅員はアカリを救ったサユキの行動にしきりに感心し、またアカリのいじめについてはシヨックを受けていた。サユキと話したことでアカリは変わった。

「私、家族に相談してみます。もう、自殺を考えたりしません」
そう言ってくれた。

駅長は同じくらい歳の子供がいるそうで余計にアカリに感情移入したのかもしれない。話し合い終わり駅員室を出るときに、いつでも遊びにきなさい、とまで言ってくれた。

「本当、一人で抱え込むとダメですね。知らない間に自分を追い詰めちゃって。サユキさんが声をかけてくれたから、私は今度からこの駅の駅長室に遊びにいけることになりました」

三人で一番線のホームで電車を待っている時にアカリは嬉しそうに言った。時間はもう午後七時になろうとしている。電車はしばらく来ないようだ。二時間前より女子高生の割合は減ったが、乗客は増えている。

アカリはサユキと、その向こうに立っているカズタカを見て言う。

「アカリさんはカズタカさんから私の事を聞いたんですよね。でも、カズタカさんとどこかでお会いしましたっけ？」

結局、駅員室ではカズタカは一言も話すことなく、厳しい顔をしてサユキとアカリの話聞いていただけだった。

「……最初に言ったはずだ、俺は未来から過去に来ている。信じる、信じないはお前の勝手だ」

あまりにも無愛想な答え。カズタカは決して性格がいいわけではないが、アカリに対する態度はすこし酷いようにも思えた。

アカリは「そうですか……」と答えたが、目でサユキに解説を求めている。

が、説明して欲しいのはサユキだって同じだ。今でもまだ未来から来たなんて信じられない。

だが、アカリが実際に電車で飛び込もうとしたのだから、本当にカ

ズタカは未来から来たことになる。そうじゃなければ、アカリと裏で組んでいるか。

だがアカリには嘘をついている様子は無いし、あのタイミングは止めなければ本当に死んでいる。裏で手を組むとしても、命まではかけられないだろう。

だが、そうすると本当にカズタカは未来から？

しばらく自問したが答えは出ない。仕方なく

「そうみたい、実際に私はあなたの事をカズタカさんから聞いたから…」

言っているサユキ自身、半信半疑なのだ。聞いているアカリが信じられるはずがない。

それでも一応納得してくれたようだ。

「分かりました。…もしも私が何か手伝えるようなことがあれば、教えてください」

ホームに風が吹き始め、今日一日で何度も聞いたチャイムの後にホームに電車が来る事を告げるアナウンスが流れる。数時間前はアカリの命を運び去ろうとしていたその乗り物は今、彼女を新たな日常へと連れて行く。暗いトンネルの向こうから、ライトが見えてきた。時間に正確にホームに滑り込む電車、それを見る彼女の目に、数時間前の昏さは無い。

自分の死に救いは求めない。家族を、信じる。

風が吹き荒れるが、彼女はふらつく事なくしっかり立っている。風に髪が巻き上げられても毅然と立つその後姿は、逆風に胸を張って立ち向かう戦士を思わせた。

アカリの目の前で扉が開く。

「…まだ言ってなかったですね」

電車に乗り込み、アカリは振り返る。

「助けてくれて…。本当に、ありがとう」

その目には涙。自分が生きること認めてもらえた、自分がどうすればいいのか分かった、そして、できた新しい友達。

次々と溢れる涙をぬぐおうともしないアカリと、それをホームから見るサユキとカズタカ。そんな彼らを、扉が隔てる。動き出した電車を、二人は黙って見送った。

ホームのベンチに並んで座る。あたりは少し混んできたようだ。

「とにかく、助けられてよかったです」

「……………」

カズタカは答えない。

とにかく今日のカズタカはおかしかった。昨日はどこか投げやりで無愛想だったが、今日は純粹に無愛想だ。

サユキの言葉に何も答えず、目を閉じて何かを考え込んでいる。

「これも、カズタカさんが教えてくれたおかげです。ありがとうございます」

それでもカズタカは何も答えない。

一体どうしたのだろう。焼肉屋に入っていたときにはこんな事無かったのだが。

ここまで露骨に無視をするという事は、今は話をしたくないという事。そんな人を無理に会話に誘うような奇妙な趣味をサユキは持ち合わせていない。

しばらくは黙っていようと決めたとき、

「今日アカリを助けたことに、意味はあるのか？」

ポツリとカズタカがつぶやいた。驚いて振り向くが、相変わらず無表情で眼を閉じている。何かの聞き間違いか？と思ったとき

「繰り返しの螺旋から抜け出すために色々なことを試してきた。一時期、三日間の中で起きる何かを未然に防げば普通の生活に戻るんじゃないか、そう考えた時期があった」

唐突に語りだされたそれは、彼の苦悩だった。

三日間を繰り返す意味。それは、その間に起こる問題を未然に防ぐためではないのか。

例えば、交通事故。例えば、強盗事件。例えば、自殺。

「アカリの事を知ったのはそんなときだった。田辺駅で女子高生がいじめを苦に自殺、まさに俺が求めていた事件だ。だから、彼女の自殺を思いとどまらせれば俺は帰れると思った。そう信じた」

そうして、幾度目かの今日。カズタカは単身、アカリの自殺を食い止めることに成功する。

「いじめに苦しめられ、自信を喪失して自尊を消失して自己を見失っていたあいつに、お前は進むべき道を示す事で彼女を救った。それは、自己の修復だ。自分が誰で何をすればいいのか、それをお前は示したんだ。自覚していないようだから言っておくが、それはすごい事だ。高校生でそんな事をできるヤツを俺は始めて見た。

俺にはそんな事はできない。だがアカリを救わないと戻れない。俺は一言で彼女に自殺をやめさせた」

「…何を言っただんですか？」

今日の自分の説得を、カズタカはたった一言で済ませたというのだ。そんな言葉を使えるという事はカズタカのほうがすごいという事ではないだろうか。

「簡単な言葉だ。『君の事が好きだ』、分かるか？その日、俺はあいつに告白したんだ」

思わずカズタカを振り返る。

「どうしてそんなことを？だってあなたには彼女が…」

「だけど、それがアカリを救うには一番簡単な言葉だった。愛の告白、それは相手の全肯定だ。誰かに『好きだ』って言われれば嬉しいだろう。それがいじめにあっついて自分を日々否定されているような人なら、なおさらだ」

「でも、そのあとでカズタカさんに彼女がいるって分かったらアカリはすごいシヨックだと思います。それにカズタカさんの彼女に対しても裏切ることになるんじゃないですか？」

「そうだな、アカリの命を助けるために いや、結局は自分のために、俺はアカリをだました。その自覚はある。そのときは、繰り返しの螺旋を抜け出すためなら何でもする気だった。

螺旋さえ抜けければ、その後アカリがどうなるうと知らない。本気で、そう考えていた」

「……………最低」

思わずつぶやいたその声は、サユキの想像以上に冷たい響きを含んでいた。

自分が助かるためにアカリに嘘の告白をする。それはいくらカズタカが特別な状況にいても、許される事ではないだろう。

「…だが結局ダメだった。アカリを救ったけれど、俺は戻れなかった。日曜から土曜へ戻った時は本当に絶望した…」

そこでカズタカは口をつぐむ。だが、その先に何か言いたい事がある、そんな話の終わらせ方だった。

サユキは沈黙で先を促す。カズタカも口を開かない。先に根負けしたのはカズタカだった。

「そして…次の繰り返しで。あいつは、また自殺した」

感情がこもらないその一言から、感情がこもっていないから余計に、サユキはカズタカが苦しんでいると感じた。

「また、って言い方は変だな、その世界でのあいつにとっては、初めての自殺なんだから。

わかるか？助けて『もう自殺はしません』って言っていた相手が、やっぱり自殺してしまう。その次の繰り返しでは、もう一度アカリを説得した。頼む、もう二度と自殺はしないでくれって。あいつはうなずいてくれたよ、そして次の繰り返しで自殺した。

それを幾度か繰り返かえしてようやく気が付いた。俺が自殺を止めても止めなくても、あいつは死んでしまう。救っても救わなくても同じ事。

つまり、俺にとっては、あいつを救う事に意味がない」

幾度も幾度も自殺を見て、幾度も幾度も自殺を止めてきた。それで

も、新たな繰り返しでは必ずアカリは自殺する。助ける事と助けない事が同等で、等しく無意味だ。

焼肉屋を出てから機嫌が悪くなった理由がようやく分かった。カズタカにとつて、今日の午後は無駄働きだったのだ。

けれどそれは違う。人を助ける事を、簡単に無駄なんて言えないはずだ。

「意味が無いなんて事は無いでしょう。あなたが助けたアカリは、その後ちゃんと生きています。彼女の未来を否定することは、誰にも出来ません。」

それに今日彼女を助けた事はあなたにとつては無意味でも。私にとつてはとても意味があります」

「それは、人を助けたという満足感を手に入れるためかい？」

「からかうような口調でカズタカから言われたその言葉で、さっきまでのアカリの姿がよみがえる。」

死なせて欲しいと言ったアカリの顔、自分に向けられた恨みの目、そして携帯番号を教えたときに見せた涙。それが馬鹿にされたようで、考えるより先に口が動いた。

「同世代の子が死のうとしているのを止めるのが、そんなに気に入りませんか！？どうせ次死ぬのなら今助けなくてもいいと？人はいずれ死んでしまう、それが早いか遅いかの違いだけならそもそも、命を救う事に意味がなくなってしまうじゃないですか。」

大体、助けた事の意味ってなんなんですか？助けられた人が将来有名にならなければ助けた意味が無いとでもいうんですか？」

口調が荒くなつたサユキに、淡々とカズタカは答える。

「将来の事なんて関係ない。ただ、いくらあいつを助けても無駄だと分かつただけだ。次の繰り返しでは、必ずあいつは自殺する。止めても無駄だよ」

サユキは落ち着くために大きく息をはいて、必死に落ち着く。そうして

「じゃあどうして、今日は彼女が死のうとしている場所と時間を教

えてくれたんですか？」

今日一日が無駄だと言う彼の矛盾を突いた。

「……………最近の繰り返しではずっとアカリの事は無視していた。

だから、たまには止めてやってもいいかな、と思った。それだけだ」
そんな言い訳じみたカズタカの答えを、アカリは即座に否定する。

「いいえ、それは違います。あなたはアカリが飛び込む瞬間走っていました。本気で彼女を止めようとしていました」

アカリが飛び込むとした場所は駅のホームの中央。

飛び込む瞬間、サユキからはアカリの向こう側にカズタカが見えた。必死の形相で走る彼は、全力でアカリを助けようとしていた。それは、たまには助けるといような投げやりな態度では絶対になかった。

「あそこで助けなかったら、駅まで行った労力が無駄になる。俺は無駄が嫌いなんだ」

今度こそ完全に言い訳となったカズタカの発言を無視して、サユキは先を続ける。

「今までの繰り返ししてきた中で、助けたアカリと助けられなかったアカリがいる。あなたは、助けたことに意味を見つけてしまうと、助けられなかった彼女に意味がなくなってしまうから、助ける事に意味が無い、なんていつているんじゃないですか？」

助けるも助けられないも同じ。ならば、助けたアカリも助けなかったアカリも同じという事。

「……………」
カズタカは何も答えない。ただ黙って前を見つめる。

「気が付いたのは、助けても無駄ではなくて、助けられないという事じゃないんですか？自分ではどうしてもどうしても助けられないと、繰り返ししている間は助けられないと気がついたから。辛かったのは、助けたくても助けられないと知ったから…」

「知ったような口を利くな！」

怒りとほんの少し迷いを含んだカズタカの鋭い言葉がサユキの言葉をさえぎる。

気まずい沈黙が流れ、ホームのざわめきが大きく聞こえる。やがて

「悪い、言い過ぎた」

駅の雑踏にまぎれながらもその言葉はちゃんとサユキに届いた。

カズタカが感情的になったのは初めてだ。そして、それで確信する。カズタカはできるなら全てのアカリを助けたいのだ。だがそれは出来ない。そんな、普通の人なら感じる事のない、感じられる事のない無力感にとらわれている。飛び込もうとしていたアカリに向かつて走る彼の真摯な顔を思い出し、どこか投げやりな表情の裏に隠れているあの真剣な顔が彼の本来の姿ではないのか、と思う。

確かに彼が今回も螺旋を抜け出せなければ、彼にとって今日の出来事は意味がなくなってしまっただろう。だからサユキはこう言った。

「今回は私に宝珠を預けているじゃないですか。だから繰り返しの螺旋から抜けられるはずだって、昨日のあなたはそういつていました。今回は今までとは違う、抜け出せますよ。だから今日アカリを助けたのは正解です。」

そして、もしもあなたがまた繰り返しの螺旋に落ちても。アカリは私が面倒みますから、大丈夫です」

ホームに電車が入ってくる。磁石に引かれる砂鉄のように、扉の正面となる位置に人が並びだす。ベンチから立ち上がり、さあ行きましようとかズタカを促す。遅れて立ち上がったカズタカの顔には苦笑い。それは焼肉屋を出て初めて浮かべる、やわらかい表情だった。

「俺が螺旋の繰り返しに落ちても大丈夫、か。そうならないために必死になっている人にそういう事を言うってのは無神経なんだか……」扉が開き、人のざわめきと放送でホームが騒がしくなる中。

「でも、アカリの事はもう心配しないでもいいんだな。あとは任せた

「よ

本当に安心した声で言ったそのセリフを、サユキは確かに聞いた。

7・日曜日・螺旋原因

宝珠を持って、日曜日の午後十時から月曜の午前六時まで一緒にいること。それが土曜日の帰り、地下鉄の車内でカズタカから提示された条件だった。

「そのかわり、場所はどこでもいい。俺は多分モールの近くにいますだ」

カズタカは最後にそう付け加えた。

「わかりました。明日、午後七時くらいにモールへ行きます。そこであなたと合流して、朝までいればいいんですね？」

「ああ、頼む。しかしどこで朝まで過ごす気だ？」

深い意味で一夜を共にするなんて気は、サユキには無い。相手が犯罪者の可能性があるとなつてはなおさらだ。

電車はスピードを落とし始める。車内のアナウンスが、次がサユキの降りる駅だと告げた。

「場所は二十四時間営業のレストランにします。お店は明日決めましょう」

犯罪者と一夜を共に過ごす気は無い。じゃあ犯罪者じゃなかったら、という自問に自答せず、サユキは電車を降りた。

時刻はもうすぐ午後六時。外は夕方。一日が緩やかに終わろうとして、サユキにとってのメインイベントが始まるうとしている。

宝珠はバッグに入っている。そろそろ出発しないと七時前にモールに着かない。これからのことを考えるとあまり落ち着かなかった。何をすべきか考えている間に時間だけが過ぎてしまい、結局ほとんど準備も対策もしていない。本気で遺書でも書こうか迷ったが、縁起でもないと思い直し書かなかった。

親にはすでに友達の家に泊まる、と言ってある。両親も昔のように

誰の所へ誰と行っていつ帰ってくるのか聞かなくなったのは、ひとえにサユキへの信頼の表れだ。

これから一昨日知り合った窃盗犯とご飯食べてきますとても言えない。

何も知らない両親が、行ってらっしゃいと笑顔で送り出してくれたとき、少し胸が痛んだ。自分は無事に帰ってこられるのだろうか。いや、帰ってくる。絶対に。

怖がってはいるが、サユキにはいつでも退路があった。

腕を掴まれた時。振りほどいて大声を上げればよかった。

走り出したとき。ついていかずに抵抗すればよかった。

公園に着いたとき。話を聞かずに逃げればよかった。

日付が変わったとき。探しに行かなければよかった。

一緒にいてくれと言われたとき。はつきりと断ればよかった。

彼女がいると聞いたとき。…どうすればよかったのだろう。

その全ての退路を断って、今の自分がある。ならばここから先起こる事は全て自分の責任。無事帰ってこられるように全力を尽くすだけだ。

日が沈み始め色彩を失いつつある街を、彼女は一人歩き始めた。

サユキとて、無策でカズタカに会いに行くわけではない。

もし自分に何かあったとき、事情を知っていて警察や家族に連絡してくれる人が必要だ。

だが学校の友達に「未来から来た犯罪者と一緒にご飯食べに行くから、私に何かあったら警察に連絡してね」なんて言えない。

だからこの役目を任せられるのは、カズタカの事情を知っていてなおかつ信頼できる人。

今のサユキの友達に、そんな都合のいい人は一人しかいない。

携帯を取り出し、昨日聞いた番号を呼び出す。昨日の今日でお世話になるとは思わなかったが、今はそんな事を言っていられない。

携帯のディスプレイに表示された十一桁の数字。その数字の上には、アカリと名前が映し出されていた。

カズタカはモールの前の階段に座っていた。

一人で、何をしても無く。何かに緊張するような様子で。

時刻はあと十分で午後七時になるところだ。

モールは昨日は警察の現場検証で一日閉鎖していたが、今日からは通常の営業が再開されている。当然、最上階の特別展示室は封鎖してある。

休日の夕食時でもあるこの時間、モールの回りの人通りは多い。

カズタカから少しはなれた所で周囲を見渡す。やはりスーツ姿にサングラスで新聞を読んでいるような者はいない。家族連れやカップルが楽しそうな笑顔を浮かべて歩いていく、インターネットで『街』と『幸せ』で画像検索をかければ出てきそうな風景だ。

それでもきつと、このざわめきの中に窃盗団が紛れ込んでいる。そしてもうここまでできたら戻るわけにはいかない。

柱の陰に隠れ深呼吸する。神様、どうか無事に帰れますように、と心の中で祈りをささげ、カズタカに向けて歩きだす。

こんばんは、と声をかけたサユキをカズタカは怪訝そうな顔で見上げる。

宗教の勧誘か？それともキャッチセールスか？とその顔に書いてあるため、先手を打った。

「一応断っておきますが、宗教の勧誘でもキャッチセールスでもないです。昨日と一昨日のあなたに頼まれてここに来ました」

その一言で、カズタカの目に驚きの色が混じる。

「昨日、一昨日……。その、悪い。よく覚えていないけど俺は何て言っただったっけ？」

俺は何と言っていた？と聞かないのはまだサユキを信用していないからだろう。

「今日のあなたに、宝珠を渡すようたのまれました。そのあと、無事明日に行くことができるか見届けて欲しい、とも」

その言葉にカズタカの顔がこわばる。それが驚きによるものだと気が付くのに、アカリは少し時間がかかった。

「…宝珠を、もっているのか？」

その言葉の意味を分かっているのか？とでも言うような眼差しと口調に少し気圧されながらも、

「はい、一昨日の金曜にあなたから預かっています」

はつきりと答える。

「……そうか、わかった。とにかく君がきてくれて助かった」

サユキが事情を知っていると納得したようだ。昨日に比べて理解に必要な時間が短くなっている。

「で、どこで時間をつぶす？」

「場所は私に任せてくれるという事だったので、ファミリーストランにしました」

モール周辺にあるファミリーストランの名前を挙げていくカズタカに首を横に振り続ける。

「ここから電車で二十分くらい行った所に、行ってみたかったお店があるんです。そこで十時になるのを待ちませんか？」

ついでにその場所は繁華街であり、夜でも人通りは見込める。もちろん前から行きたかったわけではない。

おそらくこの周囲のファミリーストランには、窃盗団が待ち伏せしている。ここは敵地で、自分に有利な場所なんてない。相手が複数に対しこちらは自分ひとりだけだからだ。アカリにも同席してもらおうという手もあったが、彼女をこれ以上巻き込むことに気が引けた。

複数いる相手との条件が互角となる場所を考え、ひねり出した答えがここから離れた場所、という非常に単純なものだった。そんなア

カリの提案にも

「ああ、いいよ」

カズタカは不信がるそぶりをみせず、あっけなくOKをだす。サユキにしてみれば少し拍子抜けだった。

そして思う。あっけなくOKを出したのは、行き先も敵地だからではないのか。相手の規模によってはどこに行っても先回りされ、待ち伏せされてしまう。

大きな不安を抱えながら、先に最寄り駅に向けて歩き出したカズタカを後ろから追いかけた。

移動先のお店も結局ファミリーレストランだ。時間は七時四十分を回っている。

彼を後ろから追いかけたのはカズタカが携帯電話を使うか確認したかったかで、そんな様子は無かった、つまり彼はこの場所のことを誰にも連絡していない、ここには敵の手は回っていない。だから、自分達より後に来た者だけ警戒すればいい。

そう考えていたが、実際はそんなに甘くなかった。

世間は連休の最終日。サユキたちが来たときにはもうすでに何人も客が順番待ちをしていたし、あとから来る人の流れも絶えない。ここにきて繁華街というのが裏目にでた。これでは後から来る人を警戒するなんて不可能だ。そう思っているそばから、また一組のカップルが入ってくる。

すでに名前を書いてから二十分が過ぎているが、未だにサユキたちが呼ばれる気配は無い。食事処で待たされるのを好む者はいない。カズタカに悪い事をしたかな、とも思う。

隣に座っている彼の顔を盗み見る。退屈そうではあるが、不満な様子はなく、そして緊張しているようにも見えた。

「すいません、ここまで来て待たせちゃって」

と謝るサユキ。だがカズタカは

「たかが数分じゃないか。今まで俺が繰り返してきた時間に比べれば微々たる物だ」
本当になんでもないことのように言った。

「2名でお待ちのシノヅカサユリ様、お待たせいたしました」
彼女の名前が呼ばれたのは、名前を書いてから30分ほど経った後だった。

店のほぼ中央の席に案内された。店の中央付近という事は窓から離れているという事で、店の外側から監視されにくいという事だ。それはサユキにとって幸運だった。
席につく時、サユキはさりげなく入り口を見るような位置に座る。カズタカは当然彼女と向かい合うように座り、結果入り口に背を向けるような形になった。

「シノヅカサユリ、か」
「偽名です。こういうところに書くときは、いつもその名前を使っているんです」

だから余計に、カズタカが彼女の本名を知っている事が不気味だった。どこかで見られたという事はありえない。

「なるほどね。じゃあ俺も今度からそうしよう。何か適当な名前を考えないと」

そっぴいながらメニューを広げる。
メニューを選んでいるのか、名前を考えているのか。はたまた両方か。非常に分かりにくいのが、別にどちらでも構わない。サユキもメニューを広げ食べる物を選び始める。

カズタカは和風ハンバーグのスープとパンのセットを、サユキはシュードリップとスープを頼んだ。

「それと、ドリンクバーを二つお願いします」

最後にそういって、注文を終える。

「時間をつぶさないといけないからな。あんまりドリンクバーって好きじゃないけど、こういう時には最適だ」

確かにそうだろう、とサユキは思う。問題は、盗品を預かった拳銃に犯人と向かい合いながら時間をつぶすなんていう時が普通の人には無いという事だが。そう思い、曖昧に笑ってやり過ごした。

ドリンクバーの話が続くのかと思ったが、

「一応聞いておきたいんだけど。一昨日の俺から宝珠を預かったのか？」

突然、話が本題に入る。今日は楽しく食事をしに来たわけじゃない、それを思い出し、再認識する。

「ええ、そうです。一昨日あなたは、モールから宝珠を盗み出して逃げる途中私を巻き込んだんです」

そして二日間の出来事を説明する。

モールから飛び出してきた事。

公園で協力を依頼された事。

焼肉屋での昼食、そしてアカリを助けたという事。

そして、宝珠を持った状態で午後十時過ぎに何が起きるのか見届ける事。

一通り話し終わるとちょうど頼んでいた食事が運ばれてきた。チェーン展開しているファミリーストランだ、もとより味は期待していない。

ウェイトレスが伝票とごゆっくりどうぞという言葉を残して去るまで、示し合わせたように二人とも黙っていた。

そしてカズタカの第一声は

「……そうか。アカリ、助けたんだ」

自分の宝珠の事ではなくアカリの事で、その顔は少し嬉しそうだった。

「昨日のあなたは、彼女を助ける事なんて無意味だ、って言っていましたけどね」

皮肉を込めて言っただけ。カズタカは自分が嬉しそうな顔をしている事に気が付いたのだらう、いつもの無表情に戻りながら

「ああ、確かにそうだ。彼女を助ける事は無意味だな。…だけど、今日ここで俺が普通の生活に戻れば、俺は、初めてアカリを本当に救えた事になる」

最後の言葉は、サユキに向けられた言葉ではない。おそらく自身に言い聞かせている言葉。

「大丈夫です、宝珠はちゃんと持ってきていますから。今日でこの螺旋からお別れですよ」

カズタカも、そうだなと短く答える。

「とりあえず暖かいうちに食べよう。十時まではまだ時間がある、詳しい事は食べながら話そう」

「宝珠は持ってきているんだな？」

ちよつとサユキがリゾットからスプーンへとスプーンを動かすとき、唐突にカズタカが口を開く。

「ええ、今カバンの中に入っています」

「そうか」

そう短く答えてカズタカは再び食事に戻る。彼にとって今日は宝珠を取り戻す日。その質問は当然だらう。

カズタカは窃盗犯である。これはもう間違いない。そして彼が言う十時という時間。これは、何かのタイムリミットではないのか。それは逃亡するための飛行機の時間だったり、あるいは彼を脅している者への報告期限なのかもしれない。

サユキが描く理想の流れは、宝珠を渡して開放されることだ。だがそれなら、わざわざサユキと一緒にいてくれと頼む必要が無い。ここに来て最悪の想像が頭をもたげてくる。

このファミリーストランは人目が多く、手荒な事はできないだろうと思う。そして同時に、十時に必ず何か起きる、サユキはそう

感じていた。

そしてその想像は現実のものとなる。

ハンバーグを食べ終わり、サラダも無くなった。

今テーブルの上には2皿目のポテトとドリンクバーと、宝珠が入ったサユキのバッグがおいてある。

入ってくる客に目を向けていた 全ての客の位置を把握できるような数じゃなかったので、監視は出来なかった が、時間が九時を過ぎてもまだたくさんのお客がいる。そしてその中には『ガラが悪い』と言って差し支えない人たちも、いる。だが、窃盗団というよりただの不良崩れといった雰囲気だ。

時計は九時四十五分。もうお互い話す事はなく、時々雑談をしながら時間を過ごす。

「十一時以降は深夜料金で値段が上がるのか。まあ、俺には関係ないけどな」

メニューを見て、人事のように言う。確かに彼にしてみれば人事なのだろう。人事という振りなのだろうが。

「出されるメニューの価値は変わらないのに、時間で値段が変わるっていうのもよく考えるとおかしい話ですよ」

「夜になって値段が上がった分、量を増やすとかすればいい」

「サラダのレタスを少し増やすとか、パスタの長さを一割長くするとかですか」

「時間によつて長さが変わると面白いだろうな」

そんな雑談をしながらも、カズタカがいう「眠りについてしまう」時間まであと少し。そこが一つの区切りとなるだろう。何が起きるか分からないから、何に警戒すればいいのかもわからない。

話が途切れたタイミングでカズタカは飲み物を汲みに行った。少し深呼吸をする。

何に警戒すればいいのかわからない緊張状態というのは、思いのほか体力と精神力を削る。これを一晚続けなければいけないのか、と

思うと疲労感も倍増だった。

そして、そんな状態だからサユキは気がつかない。カズタカが時々見せる、焦燥した顔に。

十時。普通の人なら日付が変わる二時間前で、九時から始まる一時間枠のドラマが終わるといふ程度の意味しか持たないその時間にむけて、二人の緊張は高まっていた。

「未来って、『未だ来ない』って書くだろう」

毒々しいまでに緑色で、果汁なんて一滴も入っていないのにメロンと謳う液体をテーブルに置いて、カズタカは唐突に切り出した。

「ええ、そうですね。意味もその通りでしょう？」

「そうだな、未来って言うのと明るいイメージがあるだろ。未来がある、って言うのとポジティブな感じがするし、逆に未来が無いなんてネガティブでもうすぐ死ぬのか？という推測までされる。

でも、その未来というポジティブな言葉の中に、『来ない』なんて否定の意味が含まれているっていうのはちょっと意味深だと思わないか？」

サユキはこの会話から言いようのない重みを感じた。

「まあ、そうですね」

「俺にとつての未来は月曜日以降のことだけど未だ行けない。もう来てしまった時を繰り返している、俺ほど未来って言葉から遠い人間もいないだろうね」

そう言うカズタカの顔は、今まで見てきたどんな笑顔よりも寂しさと悲しさと悔しさをにじませながら、笑っていた。そんな顔をした人にかける言葉などあるはずがない。サユキはただ黙ってカズタカを見る事しか出来ず、

そして、カズタカの様子がおかしい事に気がついた。

うつむいたまま、顔は昏い笑顔だ。その表情が消えない。

知らない人なら絶対に近づかないし、知っている人でも声をかけようとは思わない。そして、体がゆっくりと前後に揺れ始める。

その様子をどこかで見た、と思った。

それは、確か授業中。今まさに眠りの世界へ旅立とうとしているクラスメイトが、そういう動きをしているのを見た事がある。とっさに彼女は時計を見る。時刻は九時五十九分。

カズタカのゆれは、いよいよ大きくなってきている。笑顔は消えているが、目もとじられている。このままでは危ない、と思いつさにカズタカの前にあるコップとグラスを脇に寄せる。

次の瞬間、まるでそのタイミングを見ていたかのようにカズタカはテーブルに突っ伏した。

それは突っ伏したというより、テーブルに頭突きをかましたようなものだ。

ゴン、という鈍い音が店内に響き渡り、テーブルの上においてあった食器が一瞬浮き上がる。だがそれでも、サユキの機転が無ければ効果音は『ゴン』ではなく『ガシャン』や『グサツ』だっただろう。あれだけの音を立てたのだ、カズタカの頭だつて無傷ではすまないだろうが、それでもこぶ程度で済めば御の字だ。

ひとまずほっとする。

そして、何が起きたのか考えてみる。

カズタカが机に突っ伏してピクリともしない。寝ているのだろうか。だが、どちらかと言えば気絶に近いと思う。そして寝たとしても気絶としても、カズタカの意図がわからない。

確かに10時は何かの区切りではあるだろう、と思つてはいた。だが本人がこうして寝たふりをしてしまつては、この後の展開が分からない。考えられるのは、この後彼の仲間が来て拉致されるとかそういうしたことだがそれにしたてカズタカが寝る必要はない。∴彼の狙いは何だ？

ここで『カズタカの話しを信じていました』という態度を貫くには、起こすそぶりをしておいたほうがいいだろう。カズタカにしても、どこかで見ているであろう彼の仲間に対しても、アピールしておいたほうがいい。

そして違和感。

どこかで見ているだろう彼の仲間。彼らに対するパフォーマンスでもあるのに。

彼女の周りに誰もいなくなっていた。

店内は無人で、厨房の中からは何の音もせず、レジにも誰もいない。耳を澄ませる。店内に軽く流れていたBGMすら今は無く、ただひたすらに静寂だけがあたりを支配していた。ついさっきまでカズタカの後ろに座っていたカップルも、仕切り一枚隔てて右側に座っていた高校生くらいの男の子も、店内を見渡していた店員も。誰も、いない。

…つまりこれは、何かのドッキリで。カズタカが自分に接触したときからそれは始まっていたのだろう。そして最後に突然誰もいなくなる方法で対象者を驚かせて終わりにする。きっとそうなのだろう。だからカズタカは強盗犯ではなく、周囲の人達はみんなエキストラだったのだ。

その欠陥だらけの仮説を今は信じる。そうしないと、怖い。そうやって納得していないと、怖い。理解できない事は、怖い。だから無理やりにでも自分に理解できるストーリーに置き換える。

そうして、自分の時計をみて。今度こそ彼女の頭は真っ白になる。彼女が付けているその時計はアナログだったが、今はどの数字も示していない。正確には、どの数字も示せない。

彼女の腕に巻かれた時計から、針がなくなっていた。

カズタカが強盗犯、という仮説。これはありえる。

カズタカがドッキリの仕掛け人、という仮説。これもありえる。

だが、どうすれば腕時計の針を消す事ができるのか。ついさっきまではちゃんと針がついていたのだが、今となってはどこにも見当たらない。

方法が分からない。時計はずっと腕につけていた。誰かに不自然なまでに近づかれた事は無かったし、もしいたとしたらすぐに分かっ

ただろう。

全身に嫌な汗が出てくる。足元に血が溜まる、貧血に似た感じがする。頭がしびれて手が冷たい。呼吸が乱れて視界が狭まる。

落ち着け、と自分に言い聞かせて必死に呼吸を整え、周りの状況を考えてみる。

店内には誰もいない。これはもう事実で認めるしかない。なら、店の外はどうだろう。そう思い、出入り口に歩いていく。が、鍵でもかかっているのか、扉はびくともしなかった。外の様子を伺おうとしたが、真っ暗で何も見えない。

繁華街の真ん中にあるこの建物の外が真っ暗というはずはないのだが、店の光が届く範囲しか外の様子がわからない。まるで、この先が作られていないテレビゲームのようだ。

店内を回って見たが、やはり誰もいない。厨房の中も同じだった。仕方なく元の机に戻ってくる。カズタカをゆすってみたが、何の反応もない。

とりあえずコップに新しくレモンソーダを注ぐ。冷たい炭酸を少し飲んで、新ためて今の状況について考えてみる事にした。だが、何を考えればいいのか。一言で言ってしまうえば、意味が分からない。サユキはてつきり、カズタカはモールから何らかの事情があつて宝珠を奪った強盗犯だと思っていた。彼が口にする「未来から来て、三日間を繰り返している」という話は嘘だと思っていた。

だが、今の状況はどうだろう。どうすれば一瞬でファミリーレストラン内の人間を消して、店の外を完全な暗闇にし、さらに持ち主に気づかれないよう時計の針を抜けるというのか。

もう一口飲み物を口にする。この夢のような中でレモンソーダの味が不自然なほど、これは現実だと教えてくれている。

状況の判断は諦めて、これからの事を考える。が、それも予測ができない。何が起きるのか、何も起きないのか。

彼が永遠と三日間を繰り返したように、自分も永遠とここにいるはめになるのか。先の見えない恐怖、終わらない事の絶望。その一端

を垣間見て、カズタカの言っていた三日間を繰り返しているカズタカの心情を少しだけ体感できた。

そんな最悪の想像を打ち消そうと、ストローではなくコップから直接飲み物を口に運ぶ。

まだそうと決まったわけじゃない。次の瞬間にも元に戻る可能性がある。

こうなってしまった原因は、おそらくカズタカにある。だからこの状況を抜け出すには、カズタカに起きてもらう事が一番早いような気がした。席を立ち上がり、机に倒れて目を閉じている彼の隣へ行く。もう一度さっきと同じように、肩をゆすってみる。ぴくりともしない。

「ちよっと、おきてください」今度は声をかけてみた。ぴくりともしない。

「起きてくださいってば」今度は強めにゆする。ぴくりともしない。「起きてよ！」ほほを軽く叩く。ぴくりともしない。

「ねえってば！」両肩を掴んで机から剥がそうとしたが、思ったより重くて途中で手を離す。やっぱりカズタカはぴくりともしない。

「……」さすがに不安になり、手の脈を取ってみる。…脈はあった。右頬を下にして机に突っ伏している。その状態だと、起きたときに右頬が赤くなっているだろう。あと、耳も痛くなるはずだ。机と頭でサンドイッチされている。

「……耳、か」

ふと、一つの言葉を思い出す。

寝耳に水。寝ている時に耳に水を入れられるくらい驚く、という意味らしいが、それほど驚けば当然起きるだろう。

サユキは自分のコップを持ってドリンクバーのジュースサーバーへ。そこには、おいしい水、と書かれた水のセルフサーバーも一緒にあった。自分のコップにはアイスティーを、新しいコップに水を半分くらい入れた。

視線を上げると、水の注ぎ口の隣にあるコーヒーマーカーが目にと

まる。ブラック、アメリカン、カプチーノという三種類のコーヒーが作れるらしいが、サユキにはその差がよくわからない。だが彼女の目を奪ったのは、その隣の『熱湯』の文字。ホットティー用の、熱湯だ。

しばらくその熱湯の文字を睨み、考える。

寝耳にお湯。それは最終手段にしよう、そう思い直し水とアイスティーと新しいストローを持って自分の席へと戻る。

カズタカは目を覚ます気配が無い。寝ているというよりは、本当に気を失っているように見える。

「寝ていないのなら、寝耳に水とはならないわね……」
そう言いつつ、ストローの封をあける。

目の前のコップは水がはいっている。だがこのコップの中身は飲む目的で持ってこられたのではない。コップに新しいストローをいれ、吸い込み口を指でふさぐ。ストローの中には水が入った。

最初は頬にたらししてみる。反応なし。

次に、閉じているまぶたにたらししてみる。やはり反応はない。

最後に少し震える手で、ストローを耳の上へ。

寝耳に水。寝ている人も耳に水を入れられると驚いて起きるといふ。少しだけ躊躇って、彼の顔を見る。机に頭突きをした時から、耳の上に水を構えるこの瞬間まで表情は変わらず、全く動く気配が無い。彼女の緊張が伝わっていないのか、伝わっていても表情を変えない訓練でも受けているのか。

意を決して

「……………っ！」

指を離す瞬間、思わず目をそらしてしまう。水は耳たぶをぬらしている。半分くらいは中に入ったと信じたい。

だがそれでもカズタカは動かない。

諺になるくらいだ、普通の睡眠でも寝たふりでもここまで無反応と

いう事はないと思う。

自然と彼女の視線はコップを離れ、コーヒーマーカーの『熱湯』というボタンにむかう。出てくるお湯の正確な温度はわからないが『熱湯』と銘打っているくらいだ、相当熱いだろう。以前ファミレスで友人が紅茶を作り、そして火傷したことを覚えている。その時友人は、

「こんなの、人の飲み物の温度じゃない！」

と言っていた。人体の中で比較的溫度に強い口ですら火傷してしまう。それを耳に入れたら…。

「やっぱりそれはダメね」

カズタカは無事ではすまない。傷害罪だ。

ゼロ 以下の水に入っても平気な人間が、百度のお湯に入ると致命的なダメージを受ける。それは体を作っているたんぱく質が高温に弱いからだ。イメージとしては卵を思い浮かべるといい。冷蔵庫の中でも凍らないが、フライパンの上ではあっという間に固まってしまう。ちなみに人間の皮膚は45 以上で火傷を受け、全身の20 %以上が火傷を負うと命が危なくなるらしい。だが、耳の中、鼓膜や三半規管などの耐熱温度をサユキは知らないし、ましてや火傷するとどうなるのかなど聞いたことも無が、あまりいい予感はない。少なくとも手や足に熱湯をかけるよりも酷い事になるだろう。耳の中とはつまり頭の中だ。

自分のやるうとしていたことに少し罪悪感を覚え、大きくため息をつく。

その時、店の扉が開く音がした。

コンビニに入ると電子音がなり、店員に来客を知らせる。今まで気にした事も無かったが、ファミレスも同様の機能を持っているらしい。現に今、扉が開く音そして閉じる音と共に、「ピンポン ピンポン …」という間抜けな音が店内に響いている。

本来この音を聞くべき店員がいないのだからこの音には何の意味もなくそういう意味でも間抜けという表現はぴったりだ、とサユキは思う。そう思いつつ、混乱していた。誰かが入ってきた。誰が？どうやって？さっきまでは押ししても引いても扉は開かなかったし店の外は真つ暗で誰もいなかったのに？

混乱と恐怖した頭で間抜けなチャイムの事を考えながら、目は入り口から離せない。

間抜けなチャイムの余韻の中、やがて倒れたカズタカ越しに一人の女の人が現れた。

背中にまで届く、長く漆黒の髪。以前友達が「黒のロングストレートってイメージが重いよね」と言っていたが、目の前の人はそのうった印象を全く与えていない。

ほとんど完璧とあっていいほど整った顔立ち。人間離れたその顔は、綺麗というより先に精密という単語を思い起こさせる。それでも仮面のように見えないのは、右目の下の小さいホクロのせいだろう。

服装は和服だった。といっても時代劇で見るとような古きよき和服ではなく、また成人式で見るとような派手で実用性を伴わない飾りでもない。和服ベースの洋服、とでも言えばいいのだろうか。創作和食ならぬ創作和服とでも言うべき奇妙な服を全く問題なく着こなしている。緑色をベースに濃淡を使い分けていて、強いて言えば竹林を連想させる服だった。

だが、その人物で最も目を引いたのは「光」だった。漫画でしか見た事がない「後光」というものをもっていた。まるで彼女の後ろにライトがあるような、それでいて彼女自身がかげの事のない不思議な光。

さらによく見ると、靴やサンダルははいておらず裸足で、歩くときに足を動かしているが床に足が着いてない。床からうつすらと浮いており、当然足音はない。長い髪の毛だって時々ふわふわと浮き上がっている。

ぱつと見て、分かった。アレは人じゃない。人の形をしたナニかだ。この状況でそんな奇奇怪怪なモノが登場するの？それは反則じゃない？など思いつつもサユキが取り乱さなかったのは、すでに色々なことが起きて精神のキャパシティが少なくなっていたからだ。今更妖怪だか宇宙人だか知らないが、人外のものが出てきても「それもありかな」なんて受け入れてしまう。

その人外の者はレジの前まで来て、クルッとサユキのほうを振り向いた。限りなく仮面に近い顔が、普通の人なら目をそらしてしまうような眼力でサユキを見据える。睨んでいると言ったほうが近い。見られた瞬間、サユキの心のキャパシティが限界を超えた。一時的なショック症状に陥るが、それはむしろ幸いした。もし、まともな心で人外の彼女と目を合わせれば、飲まれてしまうだろう。ほくろの位置すら綺麗だ、などと全く関係の無い事を思う。

そうしてどのくらい見詰め合っていたのかわからない。やがて人外の彼女はふつと眼力を緩めて微笑みながら

「よかったのう」

と言った。その声はやはり若い女性の声で、聞く者の心を掴む響きを持っている。

何が良かったのか、よくわからない。まさかこの状況のことを言っているのか？と思いき返そうとすると、

「いや、お主の事じゃ。今、この者の耳に湯を注ごうとしておったる？」

この者、と行ってカズタカを指差す。自分のやろうとしていた事を考えさせられ、その酷さに愕然とする。

そして気がついた。なぜ自分のやろうとしていた事 寝耳にお湯を知っているのだろうか？

「冷水を注いだ後、思い詰めた顔で湯とこの者を交互に見ているのを見れば、誰でもわかる。わらわはそれを外から見ておつてな」

確かにこの暗がりの中外から店内はさぞかし目立つ。しかも店内にはサユキとカズタカしかいなかったのだ。店に目を向ければ自然、

彼女の姿に目を留める。

「本当に湯を入れられてはかなわんと思うて、こうして出てきたのじゃ。もし、お主が本当に湯を注ごうものなら、永遠にこの空間に閉じ込める心算つもりだったのだから」

そう言いながら、心底残念そうにサユキをねめつける。それは、捕食者が獲物の命乞いを楽しむような、そんな顔だった。

普段のサユキなら、いや、普通の人ならば、そんな顔をされれば心が折れる。今まで意識的だろうが無意識だろうが、自分は生物の頂点に立っていると信じきって、全生命体の中でも最高最強の生命体だと思い込んでいる人間に、更に上位の存在を思い出させる。普段から他の生物と食うか食われるかの戦いを演じている人間ならまだしも、普通の人では彼女の視線をまともに受けられるはずもない。それでもサユキが視線を受けていられるのは、彼女の心がキャパシティを超えているからだ。なんだか嫌な目つきをするなあ、と思いつながら初めてサユキから口を開く。

「あなた、誰です？」

服装や口調はとても現代人とは思えないし、その存在感はとも人とは思えない。それでも、『あなた、何？』とは聞かなかつた。もし人だとしたら、その聞き方は失礼に当たると思ったからだ。

「わらわは…そうなのう。トキジクとでも名乗ろうか」

「…トキジク、さんですか。職業は何を？」

「神を、やっておる」

「……」

カズタカに言われた「俺は時間を繰り返している」発言並みに常軌を逸した回答だが、サユキはそれほど驚かなかつた。トキジクの持っている雰囲気あまりに人間離れしているためだ。逆にそのなりで人間です、といわれても信じられない。

「それで、神様がどうしてここに？」

「言ったであろう、外から見ておつたらお主が面白そうな事をやろうとしていたのな。こうして現れたというわけじゃ」

それはさつきも聞いた。もし耳にお湯を入れていたら

「…永遠に、ここに閉じ込めてられていた？」

「その通りじゃ。よかったのう、思いとどまって。あの時危なかったのは、実はお主のほうだったのだから」

そんなトキジクのいう事など、もう聞いていない。

「つまり、あなたはこの空間を自在に操れる？」

「その通り。わらわにとつて、この程度は雑作もない」

「じゃあ、ここに私たちを閉じ込めたのは…」

「なんじゃ、今更気付いたのか？その通り、ここにカズタカをつれてきたのは、このわらわじゃ。こやつが今日という日を越えられず、また土曜日に戻るためにここはある。

ほほ、なんとも贅沢よのう。人のみでありながら、たとえ限られたとはいえ時間と空間を与えられておる。金でも権力でも手にする事の出来ない、究極の贅沢じゃとおもわぬか？」

「…じゃあ、カズタカが三日間を繰り返すようになったのも」

「わらわがそうした」

「カズタカが未来から過去へ進んでいるのも！」

「わらわがそうしたからじゃ」

「どうして!？」

「簡単な事。カズタカがそう望んだからじゃ」

「カズタカが、望んだから？」

予想もしなかった答えに思考が停止する。

カズタカはあんなに苦しんでいた。普通の生活に戻る事を、心から望んでいた。だが、それを本人が望んでいたとはどういうことなのか。

「そんなはずはない。彼はもとの生活に戻りたがっていた」

「そう、今カズタカはもとの生活に戻りたいと願っておる。心の底からそう願っておるのを、わらわも知っておる。だがのう、お主は

知っておるか？こやつがこの螺旋に墜ちる前の生活を？」

トキジクにそういわれ、サユキははつとなる。

確かに、カズタカがこうなる前の生活というのを、彼女は知らない。それとなく聞いた事はあったが、いつもはぐらかされてきた。

だからこそ、彼女はカズタカが強盗の一味だったと思い込んでしまつたのだが。

「その顔を見ると、知らぬのだな。まあよい。ここにいるという事は、お主にも知る権利くらいはある」

そうしてトキジクはカズタカの隣にイスを持ってきて座る。もちろん、持つて来るといふのは右手をかざして離れているイスを手元に引き寄せる、神様にだけ許された方法だった。大体、浮いているのに座る意味はあるのだろうか。

「そうは言ってもな、別にたいした事はないのじゃ。こやつ、元来は平凡なサラリーマンでの。特別優秀でも、特別出来が悪かつたでもない。普通だったのじゃ。」

切っ掛けが何だったのかは、わらわにもわからん。思うに、そんな物は無かつたし要らなかつたのだろうな。カズタカは徐々に力を失つていったのじゃ」

「力？体力が落ちて病気をしたという事ですか？」

「いいや、お主人人間が言う力とはつまり体力のことであろう？わらわがいう力とは、生きる意志じゃ」

「生きる、意志？」

「そう。まあ今の時代の民どもはそろって力が足りぬのだが。それでも、カズタカは目に見えて弱つていきよつた。わらわにはそれが良く分かつた。」

時にお主、一番力が弱くなる時を知っておるか？」

力、つまり生きる意志が一番弱くなる時期？」

「病気をした時？」

「たわけ、それは当然じゃ。この国が全体的に、弱くなる時というものがあるのじゃ」

この国全体の生きる力が弱くなる時。それだけ聞くと、とんでもない時間のように思えるが、そんなものが本当にあるのだろうか。

「……風邪が大流行した時？」

「……………」

とんでもなく冷たい、本当に見下した視線。見下したような視線ではない。で睨んでくるトキジク。サユキはそんな表情も綺麗な人だと思ふ。尤も、トキジクは人ではないのだが。

肝心の問題の答えはまるでわからない。生きる力、前向きな力、やる気、前進する力、それが弱くなる。ネガティブで、やる気が無くなる。全てがどうでもよくなってしまう、そんな時間。

自分はどうかだろう。自分が、『弱くなる』時間。

テスト前。課題の提出期限が迫っているとき。友達とケンカしたとき。だが、これは個人的な悩みだ。全国レベルで同じ悩みを共有しないといけない。

「あ」

思わず声を上げる。

「まさか……でも、だからカズタカは。それでこの螺旋に……」

思いついた一つの答え。あまりにも馬鹿馬鹿しいが、もしそれが理由ならば彼がこの三日間を繰り返す理由にもなる。

「ほう、どうやら分かったようじゃの」

「全国で力が弱まる時間。それは、日曜日の夜でしょ？」

トキジクは、満足そうにうなずいた。

「そう、その通り。あと数時間で始まる一週間を考えて、ほとんどの人が憂鬱となる時間。それはその日までの休日が楽しければ楽しいほど、強い負の力となる。

お主も一度は考えた事があるろう？『明日なんか、来なければいい。ずっと休日だけで過ごしたい』とな」

「……それで、カズタカは」

「月曜に何かあるのか、それは知らん。だが、こやつはそれを恐れてな。心底月曜など来なければいいと望んだのじゃ。」

わらわはその願いを叶えてやっただけ。本来ならば一人の我俣を叶える事はご法度なのだがな、なにこやつは特別じゃ」

呵呵と笑うその笑顔は、トキジクに良く似合っている。

サユキは確信した。トキジクは人をいじめて喜ぶタイプだ。

「だが、いずれもとの生活に戻りたくなる事は分かっておった。それゆえ、この宝珠を鍵として置いておいたのじゃが。ここまで来る事が出来たという事は、少しは成長したようだよ……」

テーブルの上に置いてあった宝珠に手を伸ばす。宝珠はひとりでに浮き上がり、彼女の手の中に納まった。あまつさえ、淡く光りだす。「此処に至るにはこやつ一人の力では無理となるよう、わざわざ逆行までさせたのだから成長するのは当然じゃが。あえてお主を選んだという事はどうなのだろうの。まさかわらわの存在に気がつくような事はないと思うのじゃが……」

トキジクのそんな独り言を聞いて気がついた。月曜が来なくていいと願っただけなら逆行させる必要は無いはずだ。

「どうしてわざわざ逆行させたんです？それも彼が望んだ事ですか？」

「いや、そこまで望んではおらぬ。逆行させたのはわらわの意思じゃ」

「どうして？カズタカを逆行させると、あなたが何か得をするの？」それを聞いてトキジクはフフフと笑う。さっきの笑いとは違い、さもおかしそうだった。どうやら普通の笑い方もできるらしい。ついでに、普通に笑うとものすごく美人だ。

「人間よ、損得ではないぞ。わらわは、こやつにもう少し強くなつてほしかったのじゃ。申したはず、カズタカは弱っておった。こやつは生きる事に不器用での、月曜を先延ばしした程度じゃ、後悔はしても強くはならん。」

分かるかのう、逆行させるとどうなると思う？」
二度目の問いかけ。といつても、分かるわけがない。カズタカの様子を思い出す。逆行していると言ったとき、彼はどんな様子だった

だろう。

「…すごい、困る」

冷たい視線もこれで二度目。だが、分からないものはわからない。

「よいか、逆向螺旋より抜き出るためにはこの宝珠が必要じゃ。宝珠はモールで展示してあるが、金曜の夜には火がでるゆえに手を出せるのは金曜中。そして宝珠を持っておらねばならんのは、日曜の夜という事になる。すると、どうなる？」

話が複雑で、よく分からない。ただ話を複雑にするために逆行させたという単純な理由じゃないだろうな？ともおもうのだが、トキジクの顔は真面目そのものだ。サユキも必死に頭をひねる。もし自分が同じ状況なら…

「ええっと、まず日曜から繰り返しが始まって。日曜、土曜は何もできないから、金曜日によくやく宝珠を手に入れて…」

そして気がついた。金曜が終わると、今度は日曜になってしまふ。

「金曜に宝珠を手に入れても、それを持って日曜へはいけない」

「そう、こやつだけ時の流れが違うのでな。後から手に入れたものを持って逆行は出来ぬのじゃ」

「それじゃ、どうすれば」

日曜に宝珠を持っていけるのか、と聞きそうになって気がついた。自分の役割を。なぜ今ここに自分がいるのか、どうしている羽目になっただのか。

「誰かに頼めばいいんだ、そうすれば日曜日に宝珠を持っていったらもらえる」

「その通り。自分ではない他の正常な時の中を生きる者に手を貸してもらい、宝珠を日曜まで持っていったら。そうすれば、カズタカは晴れてこの逆螺旋より抜け出せるというわけじゃ」

「それじゃあ逆行させた理由は、まさか誰かに手を貸してもらっためだっというの？」

「そう、『誰かに手を貸してもらったため』、詳しく言えば、誰かに助けを求めさせるためじゃ。

こやつは、いい奴でのう。人の頼みは断れん、そして自分の事は人に頼めない性質での。そうやっていつも、やらなくてもいい事を抱え込んで。それでも、本人は周りの人のためと、それを受け入れておった。

じゃが、こやつは抱え込むことは出来てもそれを処理するだけの力が無くてな。限界まで溜め込んで、どうしようもなくなつて回りに迷惑をかけるという事を数回繰り返しての」

話が抽象的になり、サユキの理解が追いつかなくなる。顔をみてそれを悟つたのだらう、トキジクは

「そうじゃのう、例えるのなら肉と野菜をかうお使いに出かけたのに時間がなくて野菜は買えなかった、ようなものじゃ。これは簡単なたとえじゃぞ？実際は、肉と野菜と調味料をかうついでにクリーニング屋と文房具屋へハシゴして子供を保育園から引き取ってくるくらいの事を頼まれておつた」

それが分かりやすいたとえかどうかは別として、言いたいことは分かった。自分に出来ない事まで引き受けてしまったということだらう。

「だがそんな事を言われても、人の身に出来る事などたかが知れておる。そして、カズタカはそれが出来ずに悩みよつた。どうすればよいかなど、すぐに分かりそうなものだが、もしかしたら分かつていて悩んでおつたのかも知れぬ。そこはいくらわらわが神とて、推し量るしか在るまいがのう」

未だピクリとも動かないカズタカを見る。

はじめて会つた時に感じた何か。ここまで彼の頼みを断らなかつた理由。

ここに来て、サユキはそれに感づき始めた。

カズタカと自分は、よく似ているのだ。

人の頼みごとを断れない。自分の事は自分で、人の事も自分がやる。だが、その先。やり切れずに回りに迷惑をかけるというのはサユキには経験がない。彼女は全てのことをうまくこなしてきた。

「カズタカは人の事も自分の事も、全て引き受けて。それが最後に出来なくて困るっていうの？周りに迷惑をかけるってどういう事？」
「どういふ事もなにも、そのままじゃ。先のたとえで言うとな、肉は買ったが野菜は買えぬ。すると野菜を欲した者は納得せぬだろう。必要だから頼んだのに、ありませんはいそうですか、とはいかぬ。引き受けるとはそういう事じゃ。出来ぬなら最初から引き受けぬ方がよい。頼む側、頼まれる側双方のためにな。」

特にこやつの場合は仕事でそれが顕著での。仕事などは突き詰めれば人と人の繋がりじゃ。そこでこやつのような失敗は、繋がりを絶ち流れを止める。周りの人間も、そのような見方をするようになる。ああ、こいつは流れを止める奴、仕事が出来ない奴だ、とな。

与えられる仕事を満足にこなせない自分への不満と怒り、周りの者からの好奇と敵意。

そういつた物がこやつの子を奪いよつた。普通では考えられぬほど、強く強く月曜を、いや、未来を拒絶したのじゃ。先の見えぬ未来などいらぬ、とな」

サユキは言葉がでない。どれほどの思いをすれば、そこまで絶望できるのか。そして昨日の出来事を思い出す。電車に飛び込もうとした彼女も、未来を拒絶していた。カズタカとアカリも似た者同士だったのだ。

未来がいらぬ、明日などこなくていい。学校が面倒で、月曜の朝が憂鬱という経験はサユキにもある。だが、カズタカのそれはそんなものではない。頑張つて人の為になるうとして、それでも出来なかつた彼の気持ち。そしてそれを迷惑だと切り捨てるトキジク。その物言いにサユキは納得できなかつた。

「人の苦勞が放つておけず、手を貸すのは悪い事ですか!？」

「自分の世話も出来ぬのに人に手を貸すなどおこがましい。そんなもの、手伝われたほうだつて困る。拳句に手伝いすら満足に行かぬようではもはや話にならぬ」

「誰かのために頑張つた彼に、そんな言い方はないでしょ!そんな、

助けようとした人から恨まれたんじゃ、彼の誰かを助けたいって気持ちじゃ報われないじゃない」

「ぬかせ小娘。よいか、誰かを助けるといふのは強者の権利じゃ。自分の身すら守れぬ弱者が誰かを助けようとする事は、罪になる。なぜか、それは他人にとつて迷惑以外の何者でもないからじゃ。それをカズタカは証明しただけ。そして一人で悩むといふのだから、なんとも贅沢な話よ」

「でも、それじゃあカズタカはどうすればよかつたつていふの？」
「簡単な事じゃ、頼まれても断るか、自分に出来ぬとわかつた時点で周りに打ち明けるか。どちらかじゃな。こやつはそれが出来ぬ奴でう。断る事が出来ぬのなら、せめて助けを求めようにはなつてもらわぬと、絶対に自分ひとりの力では解決できない問題を与えたるために、逆行させたというわけじゃ。嫌でも他人の力を借りるようにするためにな」

こうしてカズタカは、トキジクの望んだように宝珠を手に入れサクキという協力者を得てここにいる。

「じゃあ、これでカズタカは許されるのね？もう普通の生活に戻れるんでしょ？」

「そうじゃのう、お主もこやつが何故このような事態を望んだのか理解できたようじゃし……」

その言葉に

「理解、出来ないうすけど」

まるで今までの怒りや焦りはテレビの中の出来事で、そのスイッチを切ったかのように気持ち落ち着くのを感じる。

「出来ぬか？ふむ、お主とこやつ、同じ人種だと読んだのじゃが間違いないか？たかのう？まあよい。瑣末事じゃ」

「いえ、彼と私が同じ人種だつていふのは、多分その通りだともいます。私も結構頼まれたら断れない性格です。でも、私はカズタカのようにはなりません。私は自分の力量を心得ています。自分出来ない仕事は請けません」

自分の力を正確に把握し、過大評価も過小評価もしない。敵を知り己を知れば百戦して危なからず、とは有名な言葉だがまず敵を知る前に己を知らねばならない。

「私は私の事をよくわかっていきます。これまでも自分の力量を見誤った事はないですし、これから先もないでしょう。明日が来なくていいなんて思わないですし、未来は拒絶せず受け入れます。だから私には、カズタカの気持ちは分かりません」

はつきりとそう言い切った彼女を、トキジクはじっと見つめる。

それは威圧するでも蔑むでもなく、純粹に対象を観察する眼。その眼に見つめられるのならば、まだ脅しや怒りの方がいい。純粹に観察されるといふ事は、生き物というよりは固体、人間というよりは観察対象として見られているという事で、そこにはなんの感情もない。実験用ラットを解剖するのに躊躇する研究者がいないのと同じだ。

それでも、その眼を正面から見つめ返す。目をそらしてはいけないと、分かる。

そして先に眼をはずしたのはトキジクのほうだった。

「ふん、時にはお主の様な者があるから面白い。カズタカの奴、なかなかにして人を見る眼があるのかもしれないな」

微笑みながらそんな事を言う。

「おぬし、齡は？」

「十七歳ですが、それが何か？」

「ふ、そう憤るな。今の世では十七では職に就けぬのだったな。いや、奉公くらいならできるのか？まあよい。数年後、おぬしが職に就いた後にも同じ事が、同じ言が言えるのか楽しみにしておるぞ」トキジクがそういって終わる前に、世界が揺らぎ始める。

真っ暗な外と店内を隔てているガラスが、何も移さない液晶テレビをかけている壁が、カズタカが寝ているテーブルが。視界の全てが揺らぎ始める。

そして、強烈な、凶暴な眠気が襲ってきている事が分かった。同時

に、この空間から吐き出される事が感じられる。次目が覚めたときは、普通の時間に戻っているだろう。トキジクとの会話も、もう終わる。

その前に言っておきたい事があった。必死に眠気に逆らいながら口を動かす。

「ええ、私は変わらない。就職したって、何も変わらないわ。もう会わないでしょうから、そっちの世界から私の事をよく見ておきなさい」

最後はほとんど呂律が回らなかった。だがそのうなり声のようなサユキの言葉をトキジクは理解したようだ。

言い終って睡魔に負ける瞬間。サユキの耳にはトキジクの声が聞こえる。意味として理解できるだけの理性はなく、記憶にとどめておくだけの意識もない。だから音として捕らえた言葉は、しかし彼女の胸に一握の予感を抱かせる物だった。

「ほほ、案ずるな。いずれ、そう遠くない未来に合間見えようぞ…」

8・月曜・螺旋脱出

ゆっくりと視界が戻ってくる。

テーブルの隅に追いやられたメニューと店員呼び出しボタン。大昔はベルで執事を呼んだ事に由来する装置なら、ボタンではなくベルと呼ぶべきか？そして安っぽいコーティングをされたテーブル。そして塩と胡椒と爪楊枝。さらに立てかけられたメニュー。最初に見た物は、そんなテーブルの上の風景だった。

頭には硬い板の感覚。両手を枕にせず、頭を直にテーブルに当てて寝ていたようだ。とりあえず頭を起こして周りを見渡す。最後に見た状態と比べて、人が減ったようにも増えたようにも思える。

どうして自分は眠っていたのか？今起きた、という事は今まで寝ていたという事だが、その前の記憶が曖昧だ。起きていた頃の最後の記憶を探りながら目の前をみると。

カズタカが突つ伏している。やはり手を枕にしていないその姿はまるでテーブルに頭突きをかましているようにも見えて

そこで思い出す。誰もいない店内。ノイズを映す液晶ディスプレイ。針のない自分の時計。そして、人にあらざる者との邂逅。

それらが一気にフラッシュバックして思わず立ち上がる。その拍子に椅子が倒れ派手な音を立て、店内にいる数少ない客に睨まれるがサクキにはそれを気にする余裕はなかった。

特定の何かをみるわけではなく、ゆっくりと店内全体を見回す。普通の、お店だ。緩やかなBGM、数少ない客と数少ないなりのざわめき。壁の液晶ディスプレイからは、知らないチーム同士のサッカーの試合が流れている。そして、自分の左手首。腕時計は今が零時三分である事を示している。日付は、六月十六日。月曜日だった。

椅子に座りなおした所で、目の前でただの塊と化していたカズタカ

がピクツと動いた。

やがてゆっくりと顔を上げ、回りを見渡す。つい数分前にサユキがとった行動と同じだ。きつと自分の状況を確認するのは動物的な本能なのだろう。

明らかに寝ぼけている さっきまでの現象を考えると、寝ていたとも思えないのだが カズタカに、話しかけてみる。

「おはよう。よく寝ていたみたいですけど？」

「……ここは、どこだ？」

その一言が出るまでに、しばらく時間が必要だった。寝ぼけているというよりは体調不良のようだ。心なしか顔色も悪い。

「ちよつと待つてください、今暖かい飲み物を持って来るから、話はそれからしましょう。何がいいですか？」

「……コーヒー。ブラックで」

コーヒーが飲めないサユキとしては、ブラックなんてもはや飲み物とは思えない。

それでも右手にコーヒーを、左手に紅茶を持って席へ戻る。

そうしてカズタカは暖かいというより熱いコーヒーを寝ぼけたまま口へ運び、舌をやけどしている。お互いがカップに息を吹きかけながら何とか半分ほど飲んだ。

「…俺は、どうしてファミレスなんかにいるんだ？」

「あなたが日曜から月曜になる瞬間に居合わせて欲しいって言った」

からじゃない、そのおかげで私がどんな目にあつたのか分かつてるの？ と言おうとしたが、言えなかった。

突然立ち上がるカズタカ。その拍子に倒れる椅子。またか、という目でカズタカとサユキを見る客達。

もしかしたら、立ち上がって椅子を倒すのも動物の本能かもしれない。

カズタカは驚いたように回りを見渡し、次に自分の腕時計を見る。

「座つて。今の時間は…えっと、午前零時十分。六月十六日の月曜

日です」

「…本当に、今は月曜日？」

「ええ、私が信用できないのなら誰か他の人に聞いてみてください。ただし頭のおかしい人って思われても私にはフォローできませんが、それでもまだ信じられない顔をして、カズタカは席に着いた。

「もつと喜ぶと思っていましたか？」

「…どうもまだ信じられない。俺はやっぱり十時には寝たのか？」

「そうですね。寝るといふより倒れるといった方が正確ですね」

「そうなんだ。それで、それからどうなった？宝珠が無くなっているが誰か持って行ったのか？」

数時間前に机にヘッドバットをかました額を押さえながらも、抜け目なく見るべき箇所は見ている。宝珠はあのトキジクなる人物が持つていったのだろう。ここらを探して出てくる事もないはずだ。

「あなたが眠った後に神様みたいな人が現れて、宝珠を持って行きました。やっぱりあの

珠が呪いを破る鍵だったみたいです」

「神様みたいな人？何だそれ、何か言っていたか？」

「まあ、神様みたいな人というか、人みたいな神様というか…カズタカにどこまで話すべきか、迷う。お前が月曜を拒んだからこうなったんだ、と本人に直接は言いにくい。大体それは、トキジクの役目でサユキの役割じゃない。

だが、カズタカに何も明かさずに誤魔化すのも、どうかと思う。数年分も三日間を繰り返してきたのだ。その理由くらいは明かされないと、彼だって浮かばれないだろう。死んでいないが。

結局サユキは、『私はカズタカにはならない』宣言を除いて全部話した。

「…じゃあ、俺が月曜日なんて来なくていいと願ったからこんな事になったのか」

「そう、みたいです。少なくともトキジクはそう言っていました」
しばらく、沈黙。二人の前に置かれたコーヒーも紅茶も、冷めてい

た。

「君は、どう思う？月曜日が来なくてもいいなんて考える事について」

唐突にカズタカはそういった。

「私には正直わかりません。確かに学校は大変で月曜日は来なくていい、なんて思う事はあるけど…」

あなたは本気で、心の底から望んだ。月曜日なんて来なくていい、と。

その考えは、私には理解できない。無言で、そう告げる。そしてカズタカもそれを正確に読み取った。

「ああ、君はわからなくていい。明日を否定するような気分なんて分からない方がいい。俺が言っただから間違いない」
そう言って笑う。

「そのトキジクって神様が俺をこんな目に合わせた。でもその原因が俺にあるっていうのなら恨む事もできないな。」

こうなる前、まだ普通に時間を過ごしていた頃の俺の話だ。君には聞く権利がある。もちろん聞きたくないって言うんなら話さないけど」

それはつまり、彼の口から語られる今回の事件、事象の裏側。

カズタカにしてみれば誰にも言いたくない事なのだろう。どういう経緯か知らないが、未来を否定するほどの気持ちを味わうのだからそこに至る過程が面白おかしいはずはない。話す事で自身の傷をもう一度開くようなものだ。

だが、それでもカズタカは聞く権利があるといった。それならば、自分は聞くべきではないのか。

「聞きます。話してください」

サユキのその言葉を受けて、無言でうなずく。

そうして、カズタカは語りだした。遠い昔、まだ自分が普通の時を生きていた頃の話。

よくある事だ。仕事でトラブルを起こした。

後始末は熾烈を極めた。帰れない日が続いて、お金のもらえない残業時間だけが重なる。報告に行けば上司に怒鳴られて、それでも遅々として仕事は進まない。食事は一日一食、睡眠は二時間程度。休日も会社に行つて、遊びはもちろん、息抜きも全く無かった。

それでも学生の頃は運動部活をやっていて体力には自身があった。だけどそれは大きな思い違い、思い込みだった。学生と社会人、部活と仕事。それは全く別物で似ても似つかない。

そんな生活が一年近く続いた。それでもまだトラブルは解決しない。そんな毎日の中で自分の中の何か大切な物が無くなつていくような感覚はあつた。だけどそれが何かは分からなかった。

でもある日気がついた。俺の中にやる気が全く残っていない事に。本当に、一ミリも残っていない、空っぽだった。時間がたてばもとに戻ると思っていたが、それは違った。一週間たつて、一ヶ月が過ぎて、それでもやる気がでない。心の中に虚無がある、そんな感じだった。時間が過ぎてそれは消えるどころか、仕事以外でも現れ始めた。たまに休日休んでも、何もやる気がでない。食欲もない。それでも体を壊さなかったのは、学生の頃にそれなりに体を使つていたからかだろう。

でも、体は壊れなくても。心はもう壊れかけていたのかもしれない。そんな低いモチベーションでは、満足に仕事もできない。あとはそのまま悪循環だ。時間が経つごとに悪くなる。

そして翌日に会社内での発表を控えた日曜日。俺は未来を放棄したんだ。

「それから先は聞かせた通りだ。三日間を逆に過ごす羽目になったよ。いや、元々俺が望んだ事だったんだから、羽目なんて言葉は違うのか。全く、我ながら馬鹿な事を望んだよ」

「馬鹿なこと、ですか」

「ああ、馬鹿な事だ。愚かにも程がある。だって、月曜が来なくなつたって何も変わらないんだ。最初はそれでも喜んだよ、俺だけ休日を永遠と繰り返せるなんて素晴らしい！ってね。でもそれじゃあ問題は解決しないんだ。

痛くても辛くても、自分で問題のそばに行つて自分のその手で問題をぶち壊さないと、意味がない。いつ切れるか分からない三日間の繰り返しに頼るなら、自分で問題解決をしたほうがよっぽどましだ。それに気がつくまでに一体どれくらいの時間をかけたのかよく覚えていないがね」

最初は自分から遠ざかった問題に歓喜したが、やがて気が付く。永遠にたどり着かない問題は、解決出来ないという事に。一生問題に怯えて暮らす事になる。いつこの三日間のループが切れるか分からないからだ。

いつ来るか分からないのなら、いつそこちから向かつていつてやろう。それが今のカズタカの考えだった。治療法は強引であったが、その考え方はずいぶんとポジティブになった。今の彼ならもう月曜を恐れる事もないだろう。

「どうですか、数年ぶりの月曜は？」

「本当に、このときを待っていた。携帯のディスプレイにMONって表示されるのを夢見ていた。本当に帰ってきたんだな。」

明日は久しぶりの仕事だ。年単位で休暇をとっていたんだ、きつといろいろと忘れていた事があるだろう。ミスも連発するはずだ。周りの連中にとつてはただの三連休だからな。でも、俺はもう大丈夫。二度と月曜は来るな、なんて願わないよ。

だって、どんなに辛い月曜日みゆいでも、来なかつたら解決かえられなできないんだから」

そう語るカズタカの目は光を取り戻している。これから確かに辛い事が多くあるだろうが、今のカズタカなら乗り越えていけるはずだ。会社の人は驚くだろう、たった三日で数年分の成長をしているのだ

から。

とにかく、カズタカの呪いは解かれた。そして明日 否、今日はサユキは学校がありカズタカは仕事がある。目的が成ったなら、いつまでもとどまり続ける必要はない。

席を立つよう促したのはサユキの方だった。カズタカだけの特別でいられた日々は、三日で幕を閉じた。

会計はカズタカが全額はらった。始めからそういう約束だった。レジではカズタカが端数を合わせようと小銭を探している。店員のありがとうございましたという声に見送られ店を出た。

街は深夜だというのに人通りは減らない。様々なお店、街頭、車やバイク。そういったものの灯りで光り輝いている。トキジクの見せたあの真つ暗な世界とは対極にある。いつもは気づかない何気ない光。それが無い真の闇とはどんなものなのか、さっきまでその中にいたサユキにはよく分かる。あれは、新月で星の無い森の中、というよりは宇宙空間のような闇。星の無い夜でも、生き物の気配はある。だがあの時店とサユキを囲んでいた闇はちがった。生き物の気配がない、完全な『無』。

昔読んだ本をおもいだす。それには世界が虚無に侵食されていくシーンがあつたが、その虚無とはきつとああいう感じなのだろう。完全な無、完璧な闇。

駅まで歩きながら、カズタカが何を言っていたのかサユキはよく覚えていない。おそらくこれからの事なのだろう。だがサユキにとってはカズタカと離れなければいけない事の方が重要で重大だった。この三日間、振り回されっぱなしだった。だが、それは苦痛だけではなかった。

突然目の前にガラスを破って現れた。未来から来たなんて言われた。宝珠を預かったし、強盗一味じゃないかと疑いもした。そして、神様にも会えた。

本当にいろいろな事がありすぎた。だが、それももうすぐ終わる。自宅まで送る、というカズタカの申し出を丁寧にした。彼の自宅はサユキの最寄り駅を通る路線とは違っていた。ファミレスの最寄り駅の改札が別れの場所となった。

「本当に、君には」

そういいかけて、カズタカは少し姿勢を正す。その顔は初めて見る社会人としての彼だ。

「あなたには感謝しています。あなたの協力のおかげで私はずっと今日という日を迎える事が出来ました。突然現れて未来から来たなんて言葉を信じてくれて、そして約束を違える事無く今までお付き合い頂き感謝の言葉もあります。本当に、ありがとうございます」
そういつて深々と頭を下げる。

突然の改まった態度に、これが本当の別れだと実感できた。

「正直最初は戸惑ったけど、あなたの目は本当に真剣だったから。」

…正直、ついさっきまで疑っていました。てっきり宝珠を奪った強盗団の一人なんだろうって。

でも、普通じゃ出来ないような経験をさせてもらいました。今ではあなたに感謝しています」

頭を下げたカズタカに笑顔で答える。

駅のアナウンスが、二番線に電車が来る事を告げる。それはサユキの乗る電車だ。

「本当にありがとう、少し落ち着いたら改めて会いに行くよ」

「ええ、楽しみにしています。それじゃあ、さようなら。そして、ありがとうございます」

カズタカは、なんでお礼を言われるのか分からない、という顔をしている。その問いを口に出される前に小走りで改札をぬけて階段を下りる。まるでカズタカから離れるように。ホームでそんなサユキを後ろから電車が追い抜く。やがてそれは速度を落とし、ゆっくりと止まった。終電ではないが、遅い時間だ。乗る人はまばらである。サユキは一番前の車両に乗った。

椅子に座り一息つく。カズタカに関するいろいろな事はこれで終わった。そして思い返す。彼は会いに行く、と言ったがサユキの住所を知らないはずだ。どうやって会いにくるというのか。

「……はあ、携帯の番号すら聞いてないよ」
走り出した電車。誰にも聞かれる事のないその一言に、思いを込めてつぶやく。

連休は終わった。明日は学校がある。そういえば数学の宿題が出ていたが、全然手を付けていない。

まあ、いいか。数学の宿題は出席番号順で当てられる。自分の番号が来るのは当分先の事だ。

そう、前向きに考えよう。決して、『ああ、もう一度三連休が来ないかな』なんて思わないように。

9 ・ エピローグ

昔見た映画を思い出す。

一作目と二作目はクリスマススマスイヴが舞台だった。三作目の舞台はいつだったか。二作目は一作目よりもつまらない、というのが映画に対する持論だったが、このシリーズはいい意味で裏切ってくれた、そんな映画だった。

そういえば、カズタカの現れ方も映画さながらだった。顔を庇い、ガラスを破って現れた。警備員というおまけ付きだ。いや、おまけといえどもつとすごいモノが憑いてきたのだが。

あの日から三ヶ月経った。

あの日からカズタカとは会っていない。

今考えると、あの日三日間は夢の中のような気がする。何一つ証拠がない。手元に残っている物はなにもない。自分の夢の中の出来事なら、それでいいのかもしれない。

そんな事を思い出しながら、今サユキはあの日と同じ場所を歩いている。

月日は逆流することなく流れ、もう立派な冬。街はイルミネーションに彩られ、もうすぐやってくるクリスマスに向けてその装いを改めている。これから年末にかけて、最も華やかな季節になる。

だが、こう太陽の昇っている昼間ではその存在は分らない。サンタクロースのポスターや、葉を落としてLEDライトを纏った街路樹、そして冷たく乾いたこの季節特有の空気。

やがて、カズタカが現れたガラスの前に来る。すでに新しいガラスに張り替えられ、カズタカの面影は何もない。ここにくればあの黒い服をした青年がいるような気がした。全く期待していなかったといえは嘘になる。期待していたのは本当に少いで、だから彼がここにいないくても、あまり落胆しなかった。

そうして、モールの下まで来る。あの展示室では今『クリスマス
歴史に見る社会情勢』という催し物が行われているらしい。今日な
ぜここに来たのかというと、授業と遊びのためだ。

年末になり、成績の悪い一部の生徒に対して特別課外授業が言い渡
された。それは、どこか科学館、博物館、展示会等へ行きそこでの
内容をレポートにまとめると言うものだ。サユキは成績的に全く問
題が無かった。が、当然それに賭ける生徒もいる。

「どうせならみんなで行こうぜ」

言い出したのは、まさにそのレポートに賭ける生徒だった。その提
案に、サユキも乗ったのだ。そして選ばれた展示会が『クリスマス
の歴史に見る社会情勢』だった。他の生徒に言わせると、今の季節
らしくてちょうどいい、だそうだ。

集合場所になっているモールの正面出入り口に着いたが誰も来てい
ない。どうやらサユキが一番らしい。時計を見ると集合時間まであ
と十分ほどある。

微妙な時間だ。ただ突っ立って待つにしては長いが、どこかへ行く
には短い。

さて、どうしようかと考えている時、視界の端で、人の流れの合間
に黒いジャケットが見えた。

最初は人違いだと思った。黒の服を着た人を見て何度も落胆した。
だから黒服をみて注意はするが期待はしない。それがこの三ヶ月で
習得した事だ。黒ジャケットは人の波を縫いながら近づいてくる。

モールに入るのか、と思ったがどうも違う。まっすぐにサユキの所
に向かってくる。

近づいてい来るその顔は、髪が短くすっきりとしているが間違いな
くカズタカのそれだった。シチュエーションは違うが、あの日と同
じくらい突然の現れ方だった。驚いて、次に嬉しそうに笑おうとし
たその顔が、笑おうとしたまま固まる。カズタカの隣に女の人を見
つけたからだ。少し小柄で髪はストレートでショート。確かカズタ

カは何と言っていたか。

彼女がアメリカに留学中なんだ

その人がそうなのか。

「久しぶり。ごめんね、なかなかお礼にいけないよ」

三ヶ月ぶりに聞いた声は、三ヶ月前と比べて明るくなっている。繰り返される三日間に焦燥し疲労していた頃と比べると明るく前向きな印象を受けた。

いろいろ言いたいことがある。だが何一つうまく言葉にできない。お久しぶりです。

その後どうなりましたか？

もう戻りたいなんて思うことはありませんか？

あの三日間は現実だったんですね。

隣の女性、誰ですか？

「いえ、気にしてませんよ。大丈夫です」

そう答えるのがやっとだった。顔はカズタカのほうに向けているが、意識は隣の女性へ向いてしまう。それが通じたのか、カズタカは隣の女性をサユキに紹介する。

「俺が今付き合っている人。あの時はアメリカに行っていたんだ。って話したっけ？あの三日間が終わってから、日本に帰ってきたんだ」

カズタカに紹介されて、初めて視線を彼女に向ける。

「はじめまして、サユキさん。カズタカの彼女でミカコって言います。話はカズタカから聞いています、どうも三ヶ月ほど前はお世話になったそうです。私のほうからもお礼を言います。本当にありがとうございます」

どう見ても自分より年下のサユキにミカコと名乗った女性は丁寧に
お礼を言う。

そんなミカコの言葉も、ほとんど耳に入らない。カズタカの彼女を
名乗る女性 ミカコから目が離せない。

そして納得した。

どうして彼が時空を超えたのか、その理由が。

どうしてあのタイムリングで彼女が入ってきたのか、その理由が。

あの会話の中にあつたわずかな違和感、その理由が。

傍から見れば、サユキがミカコに見とれてるようにも見えただろう。実際そう言つて間違いではない。

ミカコの後を引き継ぐようにカズタカは話し出す。

「あれから俺は会社と社会に復帰できた。最初はやつぱり数年ぶりの仕事だったから、思い出す事が多くて大変だった。でも、今は何とかやっていけている。どんなに辛くて大変でも、時間を戻したいなんて馬鹿な事は考えないよ。あの三日間の繰り返しの日々に比べたら、大抵の困難は乗り越えられるからね。

あの三日間、本当に辛かった。何が辛かったのかつていうと『何も残せない』という事だった。どんなに頑張つて何かをしても、数時間後にはなくなつてしまふ。自分には認識できなくなつてしまふ。

だから何をやつても無駄。やつてもやらなくても同じ。いい事も悪い事も、平等に無価値になつてしまふあの時間の中では全てに意味が無かった。

だから今は幸せなんだ。ここでは全てが明日へと繋がっている。いい事も悪い事も、全部無駄にはならないし無意味ではない。意味があつて価値がある。そりゃ、失敗もするしその代償は未来で支払わなければならぬ。それはあまり気持ちのいい事ではないし、失敗を取り消したいと思うけど、でもあの三日間のように全てを無くす事に比べればたいした事はない。その失敗を乗り越えて俺は進んでいこうと思つてる。

成功は自信に変えて、失敗は糧にして。全ての事には意味がある。

それが学べたのだから、あの三日間も無駄ではなかった。

そして、それが分かつたのも、この世界に戻つてこられたのも、君のおかげだ。本当にありがとう」

それが、カズタカが数年間時空の狭間でさまよいながら掴んだ答えだった。先に繋がる事という当たり前の事に対する幸せ。普通の人

なら絶対に理解できないそれを掴んだカズタカは、あの時とは別人のようだ。否、これが本来の彼の姿なのだろう。

「もう、私にはそんな話全然してくれないのにサユキさんにはするわけ？その三日間では彼女がいる事の幸せは学ばなかったの？」
そういつてむくれるミカコ。

「彼女に会えない辛さならお前がアメリカに留学したときにもう味わい済みだ。まあ、たった数ヶ月の留学で数年間会えなくなるとは思わなかったけどね」

だから今は、本当に幸せなんだ。
言葉にはしなかったが、ミカコを見るカズタカの目は雄弁にそう語っている。

全ての事に意味を感じられるようになり幸せだというカズタカ、だが何よりも嬉しいのは大切な人と再会できた事だろう。そんなカズタカの目を見て何を言いたいのか分かったらしい。ミカコは恥ずかしそうに顔をうつむかせながら

「もう、そんな事は堂々と街中で言う事ないじゃない。本当に変わったわね、前は頼んでもそんな事言ってくれなかったのに」

ぶつぶつと文句を言う。誰の目から見ても、明らかに照れ隠しだ。
お二人とも、目の前の私の事忘れてません？

目の前でノロケるカズタカとミカコを見て、サユキはそんな事を思ったり思わなかったり。

そんなサユキに気がついたのか、ミカコは慌てて話をサユキに戻す。
「今日は、何か用事があるの？」

「ええ、学校の友達とこの展覧会に来る約束をしているんです。どうも私が一番みたいで、まだみんな来てないんですけど……」
そういつて時計を見る。針は集合時刻を指していた。

「ふふ、まだ誰も来ないんだ。いいわね、時間に正確なのはいい事よ」

そう言ったミカコはどこか不敵に笑った、ような気がした。
確かその顔は三ヶ月前に。

「それじゃあ、僕達はそろそろ行くよ。繰り返しになるけど、本当にありがとう。何か困った事があつたら遠慮なく連絡してくれ。これ、メールアドレスと携帯番号ね」

そついつて十一桁の数字とアルファベットを書いたメモをサユキに渡す。

「よく自分の彼女の前で堂々と他の女にアドレスを渡せるわね」

横からからかっているような口調でミカコが言った。

「何言ってるんだ、彼女は特別だろ。大丈夫だよ。俺が一方的に教えるだけだから。俺からは連絡しない。交換じゃなくて提示だよ」
それでも普通そついつのは影でやるものじゃないの、などとミカコは言っている。

カズタカさん、後でどうなっても知らないですよ…？

「これで、お別れだ。何かあつたら遠慮なく連絡をしてくれ。すぐに駆けつけて力になるよ」

最後までお礼を繰り返したカズタカと

「ふーん、私にはそんなこと言ってくれないのに。これからちょっとお話をしましょうか？」

カズタカの今後が気になるような台詞を残したミカコ。
突然現れて、引き止めるまもなく二人は去っていった。あれはあれで、仲がいいのだろう。

大きく息を吐く。

カズタカ、ずいぶんと明るくなった。もう大丈夫だろう。

そして、ミカコ。黒のショートヘア、緑を基調とした服装がよく似合っていたし、ちゃんと地面に足がついているようだけど。よく通る声、右目の下にあるホクロ、その整った顔。その全てが、三ヶ月前に出会った神様と同じ。

トキジクは言っていた。カズタカには強くなってもらいたい。なぜ神であるトキジクが普通の人間であるカズタカを強くなって欲しいと望んだのか。今なら分かる。トキジクにとってカズタカは『普通』の人ではないからだ。

耳に熱湯を入れようとしたとき。トキジクは止めるようなタイミングで現れた。当然だ、自分の彼氏の耳に熱湯が注がれそうだというのに黙って見ている訳がない。結局、あの不思議な出来事を一言で言えば、よくある痴話喧嘩の類で、片一方が人間以外だっただけの、たぶん二度とないよくある話だったのだ。

「あ、サユキもっているじゃん！」

遠くからそんな声が聞こえる。

見ると、5〜6人くらいの高校生の男女がやってくる。どうやらみんな遅刻らしい。

バタバタと走って、口々に言いたいことを言う。あっという間に周りは賑やかになった。

「ごめん、サユキ！待った？」

「本当ごめんね、でも悪いのはケイタだよ。あいつが遅刻さえしなれば電車乗り遅れなかったんだから」

「おい、俺のせいかよ！？ヨシヒロだって遅刻したんだろ？」

「バカ、お前みたいな大遅刻と一緒にするな！俺はぎりぎりで間に合わなかったんだ、遅刻じゃない！」

「それが遅刻っていうの。置いていこうかって言ったんだけど、エリカがもう少し待って」

「うん、ごめんねサユキ。でもケイタとかヨシヒロとかこの場所知らないって言うてたから。待たないとかわいそうかかって・・・」

「そんな訳ないでしょ、この辺に住んでてモールに来られない奴なんていないって。だめよエリカ、こいつらのいう事まともに受けちゃ」

「え、嘘だったの？…本当、ケイタ？」

「……………そ、それにしても早いなサユキ！全く、お前には時間の神様の加護でもあるのか？」

テンションの高さに付いていけなかったサユキに話が振られる。時間の神様。その問いにどう答えるべきか考える前に、自然と答えを口にしていた。

「…うん、そう。私、時間の神様と知り合いなんだ！」

そのあまりの明るい答えかたに、五人の反応はそれぞれだった。

「アハハ！なにそれ、そんな神様いたら紹介してよ！」

「お、いいねえ。俺もぜひお知り合いになりたい！」

「どうしたの、サユキ。そんなキャラじゃなかったよ？」

「その神様が美人な女の神だといいなあ」

「いや、でも遅刻はよくないよね…」

五人はその明るい答えの裏でサユキがどんな体験をしたのかを知らない。彼女がどんな思いでその言葉を口にしたのか知らない。

サユキが三ヶ月前の出来事に付いて たとえ冗談口調でも 他人に対して話したのはこれが初めてだった。

自分でも驚くほど自然と言葉が出て、あの事件に対して、心の整理が付いている事に気がついた。時間が経つとは、そういう事だ。いろいろあったけど、サユキがあ的事件から学んだ事と言えば。

私も早く、彼氏をつくらう。

そんな、当たり前前の事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559c/>

時間短編

2010年10月21日20時09分発行